
私の妹がかように可愛きわけもなし

蟬ノ河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の妹がかように可愛きわけもなし

【Nコード】

N4276X

【作者名】

蟬ノ河

【あらすじ】

尾張の国の大名の息子として生まれたおバカな子の信長君と、その妹の超絶美少女お市姫との物語。

ずっと河原で石投げたり、野原で犬を追っかけて遊んでいた信長君でしたが、ある日妹のお市が超絶美少女に成長していることに気が付きました。

兄妹で差が付きすぎて話しかけることすらままなくなっていた信長君は、その日から戦国大名となることを決意しました。

特徴的なれどバカ揃いの部下を引きつれて、信長君は戦国大名へ

の道をひたすら走りだしたのです。

第一話『私の妹がどのように可愛きわけもなし』の巻

むかしむかしのことです。

尾張の国に信長君という、それはそれはおバカな少年がおりました。

「利家。あそびいこーぜー」

「あ、信長のアニキ。どこ行く？」

「河原。石投げ競争しようぜ」

「オッケーっす」

これが幼児の会話であつたら問題はありません。

しかし信長君も利家君もすでに元服しているので、立派な大人です。大人がやっつては大問題です。

しかも信長君は尾張の国の大名の嫡男でした。いつまでもおバカなままでいいわけがありません。

いつかキチンとした大名に目覚めるはず。

周囲はそれを期待しました。

が、結果は。

「やべーよ。石投げるの、超面白くね？」

「マジそうっすね。半端ねーっすわ」

……毎日こんな感じだったので、周囲はいつしか信長君を諦めておりました。

「ところで信長のアニキ。最近、お市様を見ないんですが」

「あ、市か？」

お市とは、信長君の妹です。

元服前の幼少期には、一緒に犬を追いかけて遊びまわった記憶があります。

「そーいや、最近見ないな」

信長君の活動フィールドである野原、河原、山などでは最近お市を全く見ません。

「たまにはにっしょに遊びましょう。仲間外れはかわいそうっす」

「利家、お前優しいな。よし、呼ぶか」

信長君はお城に戻って、お市を探しました。

遊び仲間に入れるために。

ところが、です。

信長君はお城で見てしまいました。多くの家臣に囲まれて、柔らかにほほ笑む超絶美少女を。

（あいつ、誰だ！？）

面影はなんとなくわかるのですが、脳がそれを拒否します。

「お市様は今日も麗しい」

「尾張一の美少女ですな」

「いやいや戦国一ですよ」

「うふふ。そんなこと、……あるわよー」

家臣たちが大笑いして、少女も優雅にほほ笑み返しました。

やはり美少女の正体は、妹のお市でした。

優雅な着物姿が似合っています。

教養がなければ身につかない気品もあります。

（そんな、バカな！！）

信長君の記憶にある妹のお市は、鼻を垂らしながら一緒に野原を駆け回ったあたりで止まっています。

こんな美少女なはずなのです。

ないはずなのです。

「あらお兄様、今日は河原はいかないのですか？」

庭にいる信長君の姿を見つけたお市が、信長君に語りかけました。

一応の礼節は取っていますが、それは慇懃無礼と呼ばれる類のもので、敬意はありません。

「あ、いや」

お前も誘いに来た、とはとても言える状況ではありませんでした。

そしてお市が、受けるようには思えません。

お市の目には、兄に対する尊敬などかけらもなく、むしろ雑草でも見るかのような侮蔑が込められています。

(……当然か)

信長君は自分の着ている服を見ました。そこいらの野武士が着ているのとかわらないボロキレです。

教養をつけようとしたこともありません。

お市との差があります。釣り合いがまるで取れません。

あちらが菊の花ならば、こちらは雑草と思われても仕方ない状況でした。

「なんでも……ない」

「あら、そうですか」

信長君はそのまま城を後にしました。家臣たちが、「あれではとても大名は務まるまい」と陰口を言っているのが聞こえました。

信長君は利家君の待つ河原に行きました。

「あ、信長のアニキ。お市様は？」

「……来ない」

言葉少ない信長君の様子に、利家君も何かを悟りました。

「利家」

「ういっす」

「お市って、どうだ？」

「どうって？」

「なにかしってることないか？」

信長君は、いつお市が蛹から蝶になるかのような変化を遂げたのかを知りたかったのです。

「ああ、きれいって有名らしいですね」

しかし利家君のもっている情報は寡少でした。当然でしょう。利家君も名家の出ではあるものの、信長君と一緒に野原を駆け回っているのです。城内の情報は入ってきません

「そうか」

「ええ」

思いつめたように言う信長君の言葉に、利家君は何気ない様子で注目しておりました。

「利家。石投げも野原遊びも、今日でお終いだ」

「え？　じゃあ明日っから何するんで？」

「俺は明日から」

「明日から？」

「明日から俺は……戦国大名になる！」

信長君は河原に石を投げました。

川面で水が跳ねました。

おバカの信長君は、生まれかわる決意をしたのでした。

第二話『弟の信勝君と、筆頭家老の勝家君』の巻

超絶美少女となった妹に釣り合うために、戦国大名を目指すと決めた信長君。

しかしそのためにはまず、尾張の国の大名にならなければなりません。

信長君は決意を固めたその日から、猛烈に本を読み、戦術、政務の勉強を開始しました。

もともと出来が良かった信長君はメキメキ頭角を示しだったので、

そんな信長君に、大慌てした少年がいました。

次男の信勝君です。

「信長にーちゃん、いまさらそれはないんじゃないカナ？」

周囲の者たちは、嫡男の信長君はずっと野原で遊びまわっていたので、次男の信勝君に家督を譲るべきだという機運が高まっていた。

信勝君も何となくその気になっており、大名になる気が満々でした。

美少女のお市とよく似た、美少年の信勝君は、兄の勝手な行動に不満でした。

ある日のこと。

信勝君は織田家家中で筆頭の勝家君を呼び出しました。

「勝家、お前はどっちにつく気カナ？」

「お、おでは……おでは、お市様の味方なんだな」

勝家君は一見するとウドの太木に見えませんが、実際はデブでバカで、そのうえロリコンです。ひどい外見よりも実像のほうがりどい珍しい例です。

しかし武勇比類なく、彼が味方にならないことには、信勝君は嫡男の信長君に勝てません。

「お市じゃなくって。信長にーちゃんと、ぼくのどっちにつくのカナ？」

「お、おでは、おではよくわからないんだな。命令に従うんだな」

「むー」

それでは信勝君は困るのです。次男だから。

「ちょっと待っているカナ」

信勝君は街で買った黒髪のカツラをかぶりしました。

そこには妹のお市とよく似た美少女があらわれました。

「これでどうカナ……」

「おおおお。お市様なんだな。お市さまなんだな。結婚してほしいんだな!」

勝家君はその巨体でいっきに信勝君に襲いかかろうとしました。

「ちょ、待つカナ! 勝家ストップ! ぼくは信勝だ。お市じゃないのカナ!」

大慌てで信勝君はカツラを外しました。

大汗をかきながら、牛のように鼻息を荒し、勝家はようやく止まりました。

「すまなかったんだな。思わず『掛け柴田』の本領を発揮してしまったんだな」

「こんなところで発揮するなカナ」

服を正して、先ほど訪れた貞操の危機に身を震わしながらも、信勝君は確信しました。

「それで勝家、お前は信長にーちゃんとぼくの、どっちの仲間カナ?」

「お市様なんだな!」

「……ってことは?」

「信勝様なんだな！」

「よし。それでいいカナ」

「かな、なんだな」

信勝君と、筆頭家老の勝家君は固く握手を交わしました。

一方そのころ。

信長君も大名になるための足場固めを着々としていました。

「信長のアニキ。一緒に遊んでた悪がきどもも集めといたぜ」

「よし利家。そいつらは機動隊として組織するぞ」

「そしきって、なんだ？」

「それはこっちがやる。お前は先頭に立って戦ってくれればいい」

利家君はおバカでしたが、実は槍の又左と呼ばれるほどの槍の名手です。

それ以上におバカで派手好きなのであまり目立たないのですが、実はすごく強いのです。

「作戦も俺が考える。お前はただ真っ直ぐに、敵をなぎ倒せ」

「ああ、そりゃーいいや。目立つし。難しいのは信長のアニキに任せた」

「頼りにしてるぞ」

信長君もおバカであった期間が長かったので、頼りになる部下がいません。戦いとなったら利家君にすべてを任せるしかありません。

そして賢くなりつつある信長君は、戦いの日が近いことを感じていました。

敵は他国ではありません。弟の、信勝君です。

第三話『利家君のあかぞな』

ついに激突した兄、信長君と弟の信勝君。

信勝君には織田家筆頭家老の勝家君が仲間になっております。

「突撃するんだな。鬼柴田なんだな！」

柴田君の軍勢が信長君に襲い掛かります。

「来たか。利家、頼んだぞ。勝家に対抗できるのはお前だけだ」

「へっへー、任せといてくれよ」

利家君は自信満々に胸をたたきました。

しかし信長君には気にかかることがあります。

「ところで利家、その服装はなんだ？」

「へっへー。さすが信長のアニキ。お目が高い！」

利家君は赤いマントを見せびらかしました。

「なんだそれ？」

「東のど田舎に、すっげー強い『あかぞな』っていう奴らがいるんだぜ。赤ずくめの軍隊だよ。かっこいいよな。それに倣って、俺も赤いマントをつけることにしたんだ」

「あかぞな〜？　なんだそれ？」

「甲斐、あたりだったかな？　信濃？　そのあたり」

利家君のあいまいな情報に、信長君は合致する情報がありました。

「……武田の赤備えのことか？」

赤備えとは、武田家の誇る戦国最強の軍団です。特徴は軍勢全員の具足をすべて赤で染で上げていること。敵軍は赤い軍隊をみるだけで逃げ出すといわれるほどです。

「そうそれ！」

「パクリか」

「オマージュと言ってくれ」

「オマージュっても、あれは赤い色の装備で全軍を揃えることで……お前ひとり赤くても意味ないだろ」

「他の奴らも赤くっちゃ、俺が目立たないじゃないか」

利家君にとって、いかに目立つかが重要なのです。

「まあ、それはいいとして。なんでマントだけなんだ？」

利家君は赤いマントを羽織っています。

ですがその下は、袴だけで、上半身は裸です。

「ああ。赤く染めるのって金がかかってさ」

確かに赤い染料は高価です。

信長君は嫌な予感がしました。

「で？」

「マント染めたら、金がなくなっちゃって。そいで鎧売っちゃった」

「い、いつ？」

「昨日」

陣ぶれ（出撃直前の集合命令）が来てから鎧を買う貧乏人はいても、鎧を売るおバカは過去に例がありません。

信長君は頼りにする武将の奔放すぎる行動にちよつと眩暈を覚えました。

「……大丈夫か？」

「へーきへーき。商人のおやじに聞いたんだけど、鎧ってのは怪我しない為に着るんだぜ」

「それで？」

「そもそも掠り傷ひとつ受けなけりゃ、鎧は必要ないだろ。俺、頭

いい！」

「う、む」

ついこの間までおんなじ位おバカだった信長君は、複雑な気持ちで利家君を見ていました。

それはともかく、今は利家君の槍又左と呼ばれる武勇が頼りです。

「ともかく、頼んだ」

「おお、じゃあ行ってくるぜ！」

利家君は異常に長い槍をもって、勝手に走り出していきました。

一人で。

何の指示も受けていない部下たちはボー然と見送るしかありません。

「……ぜ、全軍。利家の先駆けに遅れるな！」

信長君はあわててそう指示し、軍隊が動きました。

戦いは熾烈となりました。

「よし、主力はそのまま。別働隊は俺が率いる。横腹を撃つぞ！」

信長君は少数の騎馬を率いて勝家君の軍を攻めました。

「わ、わ。敵が向こうからも来たんだな。どっちに攻めればいいんだな？」

一方で、おバカな勝家君は大混乱です。

「しっかりするのカナ。勝家、お前が頼りなんだ」

信勝君は勝家君を励ましました。

が、励ますだけでした。

信勝君には軍隊を二つに分けて、片方を抑えるほどの武勇はなかったのです。

戦いはやがて、信長君の勝利に終わりました。

「負けたのカナ」

こうして信長君は、尾張の国の大名になったのでした。

第四話『秀吉君、仕官する』の巻

秀吉君は農民の出ですが、侍になりたいとおもっているサル顔の男の子です。

どうせ侍になるんだったら偉くなりたい。偉くなるには、強い大名につくのが一番です。

「よし天下をとれそんな大名につくでヤンス」

秀吉君は東海の覇者、今川さんちの義元君こと、戦国おじゃる丸に仕官しに行きました。

しかし……。

「ほっほーい。サル顔はいらんでおじゃる」

実績もなく顔も悪い秀吉君は、相手にしてもらえませんでした。

「しくじったでヤンス。既に大大名になってるところじゃ、今からいっても偉くなれないでヤンス。これからでっかくなるところに仕官しないと」

秀吉君はいろいろと考えながら全国を旅しました。

「ここは尾張でヤンスか。……うん、ここはダメでヤンスな」

尾張の大名、信長君はバカで有名です。なんと元服した後も河原で石投げ遊びをしていたというのですから。

「バカの下について死にたくないでヤンス」

「ほー、信長ってのはそんなにバカなのか？」

そんな秀吉君に話しかけた若者がいました。商人っぽい格好をしています。

「あんた誰でヤンス？」

「気にするなよ。それで信長ってのはどんな奴なんだ？」

「まあ一言でいえば、ダメダメ大名でヤンスね」

「ほうほう」

「信長は多分、これから上京を狙っている戦国おじゃる丸に踏みつぶされるでヤンス。尾張はおじゃる丸のいる遠江から見て、ちょうど京への通り道でヤンスから」

「そうか。それじゃあなんでお前は、おじゃる丸のところに行かない？」

「それが厳しいでヤンスよ。あそこはもう家臣がいっぱいで、オイラが入り込む隙間がないでヤンス」

「なるほどな。古豪には新参が入り込む余地はないか。他に強い大名はどこだ？」

「うーん。強いのは越後の上杉謙信、甲斐の武田信玄でヤンスね。」

でもこっちも……」

「もう入り込む隙間がない、と」

「大大名でヤンスから」

「尾張はこないだ身内で争ってたから、家臣も少なくなってるぞ」

「はっは。でも死ぬのは御免でヤンス」

「……そうか」

「それに、オイラ的には、ねらい目があるでヤンス」

「うん？」

「美濃にいる、マムシの道三。こいつは間違いなく、これからでっかくなるでヤンス。それに道三はもともと油売りの商人でヤンスから、家臣も譜代は少ない。新人が売り込むチャンハスたくさんあるでヤンス」

「なるほどなあ………で、そいつに比べれば、信長ってのはどうだ？」

「まあ足元にも及ばないでヤンスね。バカな上に、家臣もバカばかり。しかも戦国おじゃる丸に狙われて滅亡確実。いいことなしでヤンス」

「そうか……。じゃあお前はこれから、美濃に行くんだな」

「そうでヤンス。町で一泊したら、美濃にレッツゴーでヤンスよ」

「そっか、まあ頑張れよ」

若者は去っていきました。

「そっちも頑張るでヤンスよー」

基本的に人のいい秀吉君も、なにも自分のことは語らなかった若者に元氣よく手を振りました。

もちろんこの若者。変装した信長君です。こっそり市中の様子を聞きに来ていたのです。

「よー信長のアニキ、なに落ち込んでるんだ？」

町から戻ってからというものの、がっくりと肩を落としてうずくまる信長君に、利家君が話しかけました。

「バカで滅亡確実かあ。自分でも思ってたけど、人に言われると堪えるな」

「あん？　なんか言われたのか。気にすんなよ。バカっていう方がバカなんだって、勝家のとっつあんが言ってたぜ」

「それ、賢い奴のセリフじゃないよな。あーあ、結構がんばってるつもりなんだけど、まだまだ街中の噂はこんなもんか」

次男を倒して尾張の大名になったものの、なかなか好転しない自分への評価に、信長君は肩を落としました。

一方。秀吉君は尾張の街で運命的な出会いをしました。

といっても、相手は秀吉君とであつたとはかけらも思っていないせん。

「あ、あれは誰でヤンス？」

なんでもないかんざし屋の入り口で、なぜか黒山の人だかりができていました。

人だかりができるのも当然でしょう。そのかんざし屋には、戦国一の美少女、お市が来ていたのですから。

「うーん。店に来ればもつといいのがあると思ったけど、あんまり変わらないわねー」

店を貸し切ってお市は買い物に来了ました。

貸切られた店の外には、一目お市を見ようとしているやじ馬でいっぱいでした。その野次馬の一人が、秀吉君です。

「な、なんて美しい。まさに天女でヤンス。可愛さの宝石箱でヤンス」

「そりゃそうさ。あの方は尾張の誇る超絶美少女、お市様だぜ」

「おお、あの人がお市さまでヤンスか。なるほど。噂にたがわぬ……いや、噂以上の……いや、もう口に出すのもはばかられるほどの美しさ……」

「ああ、兄の信長様も最近はそこそただけど、やっぱり妹のお市様にはかなわないな」

やじ馬の言葉に、秀吉君は二度も三度も頷きました。

「お市様……。ああ、お市様。麗しゅうでヤンス」

秀吉君の視線は完全に釘づけられていました。

翌日のこと。信長君が出かけようとしたら、ぞうり取りに見慣れないサル顔の小男がいました。

見かけない顔ですが、知っています。

「あれ？ お前は……」

昨日、街中で信長君をくそみそに評価していた男こと、秀吉君です。

「オイラは、秀吉と申しますでヤンス。今日から信長様の草履取りとして働くことになったでヤンス。今後ともなにとぞよろしく願いますでヤンス」

「いや、いいけど。お前、美濃はいいの？」

「何のことでヤンス？」

秀吉君は、信長君が昨日話した若者だとは気付いていません。信長君は変装してましたから。

「いや、まーいいけどさ。頑張れよ」

「はい、頑張るでヤンス！」

こうして秀吉君は、信長君の家臣になりました。

第五話『戦国おじゃる丸が攻めてきた』の巻

今川さんちの義元君こと、戦国おじゃる丸がついに尾張へと進行してきました。

「ほっほーい。邪魔するものは踏み潰すでおじゃる」

戦力比はだいたい10対1。ふつーに考えれば、勝てるわけがありません。

信長君は考えました。

「よし、奇襲作戦だ。軍隊が伸びきる桶狭間あたりで戦うぞ」

家臣たちは平伏してその指示に従いました。

「まず勝家！」

「わ、わかってるんだな。お留守番、頑張るんだな」

信長君は立ち上がり、勝家君の頬をビンタしました。

「筆頭家老のお前が留守番してどうするんだよ。おい、鬼柴田！」

「き、奇襲は苦手なんだな。山道はおでが進むには狭すぎるんだな」

「奇襲ができないくらいまで太るな！今回は伸るか反るかの一番なんだ。絶対来いよ！」

「わ、わかったんだな」

しぶしぶ勝家君はうなずきました。

「あと、利家！」

「おう、めっちゃめっちゃ目立ってやるぜ！」

信長君は今度は利家君の頬をビンタしました。

「奇襲って言ったろ！ 目立ってどうするんだ。目立たない服に着替えろ」

「えー、じゃあ目立たなくねえ？」

「だから、目立っちゃダメなんだよ！」

「ちえ、信長のアニキは厳しいな。わかったよ」

しぶしぶ利家君はうなずきました。

「あと秀吉」

「はいでヤンス。頑張るでヤンスよ」

「……裏切るなよ」

「ええー！ 信長様それはないでヤンス。オイラは信長様のベスト家来でヤンスよ」

「いや、だってお前……」

秀吉君が、初めは戦国おじゃる丸の家臣になろうとしてたことを、信長君は知っています。

「まあいいや。全力を尽くせ」

「当然でヤンス。裏切りなんて、考えも………しないでヤンス」

「おい！ いま一瞬考えたなかったか？」

「き、気のせいでヤンス」

秀吉君は平伏しました。

シンとなる軍議部屋。

どーにもこーにも、士気が上がりません。

「よし、じゃあ士気を盛り上げるために、俺が敦盛でも歌ってやろう」

『人間五十年、化天のうちを比ぶれば……』そんな重苦しい歌詞の敦盛が、信長君は大好きです。

ノリノリで鼓を用意させましたが、いつも聞かされている家臣たちは嫌気がさしています。

「あ、あんまり聞きたくないんだな」

「アニキ、それはいいよ」

「まあ、信長様が歌いたいのであれば、黙って聞くでヤンス」

評判は芳しくありません。むしろ士気はさっきより下がっています。

「なんだよ。いい曲だろ敦盛。なあ！」

「ま、まあ」

曖昧に誰かが頷きました。

盛り下がる軍議のさなか、障子が開かれました。

「あ。……お市」

そこには戦国一の美少女、お市がいました。

尾張の国の危機と聞き、さすがにお市も心配になってやってきたのです。

お市はバカだった兄が大嫌いでしたが、最近は頑張っていますし、何より今信長君ががんばらないと、尾張の国は滅んでしまうのですから。

「ひ、久しぶり」

信長君は緊張してしまいました。実の妹だというのに。

「お兄様。このたびの戦、市は戦勝を祈願しております」

「あ、うん。がんばる、よ」

超絶美少女のお市が三つ指を突いて頭を下げると、もう信長君はガチガチです。

（まだまだ、格が違うな）

緊張しながら、信長君はそう思わざるを得ませんでした。

大名と姫。進む道は違えども、格の大小には違いはありません。

でもこの戦いで戦国おじやる丸を倒せば、もしかしたらその差は縮められるかもしれません。

そうすれば昔のように兄妹で気兼ねなく話しかけられるようになることでしょう。

（よし、頑張るぞ）

「お市、俺は……」

「うばおお！ お市様、おで、頑張るんだな。鬼柴田、超頑張るんだな。奇襲大好きなんだな」

主君である信長君を差し置いて、勝家君がお市に必死のアピールをしました。

勝家君は既にオッサンなんですが、ロリコンなので戦国一の美少

女のお市が大好きです。

「オイラもお市様の為に頑張るでヤンス」

同じく、お市のために信長君に仕官した秀吉君もアピールを忘れません。

というか家臣たちはみんなお市が大好きなので、お市の周りに取り巻きのように集まって自分をアピールしました。

家臣たちがお市の周囲に行って盛り上がる一方。

ポツンと、主君である信長君は取り残されました。

「……ほんとに、格の違いを、思い知らされるな」

眩くように信長君が言いました。

「気にすんなよ信長のアニキ。俺がついてるぜ」

ポンポンと、竹馬の友の利家君が肩を叩きました。

「利家、お前はいいかないのか？」

「ん？ 俺はもう、まつにメロメロだからな」

利家君は小指をたてながら言いました。

「え？ お前、彼女いるの？」

「彼女ってーか。毎日、超やりまくり。たぶんもう子供もできてると思う」

「はああああ！？　おい、聞いてないぞ！」

「来年には結婚予定」

「いや、遅いだろ！　子供産まれる前に結婚しろよ。ってーか、その前に彼女が……やりまくりって……。ツッコミがおっつかん！」

彼女いない歴〓年齢の信長君は、髪を振り乱しました。

「まま、結婚はできとーでいーじゃん。まっは俺のペースでいいって言ってくれてるし」

「いや、ダメだろそれ！」

信長君は深呼吸しました。

そして気を取り直して、信長君はお市の取り巻きと化している家臣たちの注目を集めようとなりました。

注目を集めるのは、やはり歌しかありません。

「よし、やっぱりここは敦盛しかないな」

膝をポンとうち信長君は言いました。

「いや、だからそれはやめとこーぜ。むしろ盛り下がし」

「そ、そうかな？」

「そうだって。心配するなよ、こんなこともあるうかと、まつがいのを用意してくれた」

利家君は、半紙を信長君に渡しました。半紙には歌が書かれています。

「なんだこれ？」

「まつが信長のアニキにとって。作曲してくれたんだ。美人だし、可愛いし、センスもいいし。俺にぴったりの超嫁だな」

「はあ、そうか」

「俺が鼓やるから、信長のアニキは歌ってくれよ」

「いや、でも俺は敦盛が……」

「敦盛なんて古臭いって。今はオリジナルソングの時代だぜ。まつPが作った曲を「歌ってみた」してくれよ」

「う、うん。……わかった」

良かれ悪しかれ『古い』という言葉が大嫌いな信長君はその言葉に動かされました。

信長君は利家君の鼓に合わせて歌い始めました。

「尾張の信長のテーマソング」 作詞作曲 まつP

赤い夕陽に駆け巡る

赤い母衣衆ここにあり

黒い闇夜の中でさえ

黒い母衣衆われもあり

ああ、あいつは、誰だ

ああ、あいつは あいつは あいつこそーは！

尾張の守護大名、信長！！

「……なんか、いい歌だな」

信長君は基本的なセンスはぶっとんでいるので、この曲を気に入りました。

歌が母衣衆だったの利家君視点であることも気にはなりますが。

「やっべ。さすがまつ。俺の嫁、超かっこいいな！」

信長君に輪をかけてぶっとんでいる利家君は、なんにも考えずにもノリノリです。

いきなり歌い始めた信長君に、家臣たちも驚きながら寄ってきました。お市と話せたこともあり、盛り上がりも好調です。

「よし！ 奇襲だ。桶狭間に行くぞ！」

「おっしゃ、行くぜ信長のアニキ！」

「わ、わかったんだな。頑張るんだな」

「ヤンスヤンスヤンスう！ お市様の為、ついでに信長様の為に頑張るでヤンスよ！」

のりにのる信長君の軍勢。

そして桶狭間にて……。

「突撃！」

「負けたでおじゃる」

拍子抜けするほどあっさりと戦国おじゃる丸を打倒し、信長君は大名としての地位を着々と築いていくのでした。

第六話『お市と蘭丸君』の巻

戦国一の美少女、お市は迷っていました。

最近、兄である信長君が気になってしかたがありません。

（昔はあんなにおバカだったのに、どうしたのかしら）

お市は不思議でした。

信長君が、戦国一の美少女にして教養もあるお市に追いつこうと頑張っているなんて、お市は知る由もありません。

その信長君が、ついに東海の覇者である戦国おじやるまる丸を倒したのです。大大名への第一歩を踏み出したといっても過言ではないでしょう。

（ほんと、いったいどうしちゃったのかしら）

兄はバカな人。そんな風に思っずと生きてきたお市にとって、常識が改変されていくようで居心地がよくありません。

信長君が気になって仕方がないのです。

「ふう」

お市はため息をつきました。

侍女の一人である男の娘、蘭丸君が心配して、お市に話しかけま

した。

「押忍。お市様、いかがしました？」

蘭丸君は見た目は完全な美少女なのですが、れっきとした武士です。

剛の者ぞろいの森家の次男坊なので、実力もあります。ただし「女装していないと死ぬ！」という本人の強い要望により、侍女の格好をしているのです。

本人の希望は信長君の小姓になることなのですが、信長君が断固断りお市のボディガード兼女官として仕えています

「蘭丸、お兄様って、最近どうしちゃったのかしら？」

「押忍、信長様はかっこいいですね。ぜひ自分の菊座を捧げたいと思います」

蘭丸君は、信長君が大好きです。

一方、信長君は男色のけが一切ないので蘭丸君を遠ざけています。

「……あなた、男らしいんだか女々しいんだか、よくわからないわね」

「押忍、光栄です」

「褒めてないんだけど」

蘭丸君とお市が並ぶと美少女二人の談笑という図になって周りの者が話しかけずらくなるのですが、話している内容はいつもこんな感じです。

「ねえ、お兄様ってモテるの？」

「え？ 信長様は超絶かつこいいので、蘭丸抱かれない男ランキングではぶっちぎりの首位独走ですけど」

「いや、あなたのランキングはどうでもいいの。世間的には、どうかしら？」

「世間的………。いや、世間的にはあれは、草食系男子というか、喪男というか、そんなのですね」

「モテて、ない？」

「ないですね。まったく」

「そう、そうなんだ。ふふ、そこらへんは昔のままのお兄様ね」

お市は笑いました。昔のおバカなままの信長君を再発見できたみたいで、嬉しかったのです。

「気になるんですか？」

「き、気になってなんかいいわよ！ バカじゃないの。おバカ！ 蘭丸おバカ！」

「押忍、申し訳ございません」

蘭丸君は平謝りしました。

しばらく怒って息を切らしたお市は、また呟きました。

「お兄様モテてないんだ。じゃあまだ彼女いない歴更新中かな？」

「心の彼女としては、蘭丸がいつでも控えておりますが」

「いや、そういうのいいから」

「ふむ……、確かに、彼女いない歴は更新中ですな。大名になったのに正室も側室もないですね」

「うふ、よっぽどモテないのね。しょーがないな。お兄様は。うふ、うふふふふ」

「うれしそうですね」

「そう？」

「押忍、蘭丸も嬉しいです」

「そうなの？」

「お市様が笑っていると、信長様は嬉しいと言っていました。信長様が嬉しいことは、蘭丸も嬉しいのです。押忍」

「ふーん。そう」

お市は眩きました。

その信長君に、お隣の美濃から結婚の申し出がやってきたのは、翌週のことです。

相手は美濃の大大名。マムシの道三の娘、濃姫。相手に不足は、全くありません。

第七話『信長君、結婚を決意する』の巻

信長君に、結婚の申し出がやってきました

お相手はお隣の美濃の大名、マムシの道三の娘の濃姫です。

「け、け、結婚の申し出だと?!」

信長君は自分にやってきた驚きの状況に動揺をかくせませんでした。

モテない歴Ⅱ彼女いない歴Ⅱ年齢の信長君にとって、急激すぎる変化です。

「と、利家。どうしよう」

「いいんじゃないの? 信長のアニキもここいらでどーんと正室を持てば」

「いや、しかし。こういうのはまずお付き合いをして、徐々に相手の気持ちを確かめ合ってたなあ……」

「じゃ、そーすりゃいいじゃん」

「そ、そうだな」

信長君は「まずはお友達から始めませんか?」という返信書状を書き上げました。

書き上げたものの、信長君はちよつと不安です。

利家君も常識がないので、相談相手になりません。

そこで信長君は、一応諸国を放浪した経験のある秀吉君に聞いてみることにしました。

「……ということだ。秀吉、どう思う？」

「ふむ、この書状だと、相手は100%断られたと思うでヤンスな」

「そうか？」

「当たり前でヤンス。結婚申し込んでお友達から始めましょうじゃあ、話にならないでヤンス」

「むー。難しいな」

「どーんと受けちゃえばいいでヤンスよ」

秀吉君の意見も利家君と違いはありません。

確かにマムシの道三は強力な大名なので、婚姻関係を結ぶのは正しい選択にも思えます。

しかし……。

「あ、信長様」

「なんだよ秀吉」

「ついでだから言いますが、オイラも来月結婚するでヤンス」

「はぁ！？ お前が？」

サル顔の秀吉君を、信長君がまじまじと見ました。顔で言うなら信長君の方が美男子のはずです。

「あ、あいては？」

「ねねでヤンス」

ねねは尾張城下町でも評判の器量よしの娘です。

「うそ！ 全然釣り合わないだろ」

「そんなことないでヤンス。ねねはオイラの魅力にメロメロでヤンスよ」

「う、むう」

本人がそういうのでは、どうしようもありません。

「新居は利家殿のお隣に住むことにしたでヤンス。ついでだから利家殿もまつ殿とおんなじに日に結婚することにしたでヤンス。ダブルウエディングでヤンスよ」

「え？ 利家からはなにも聞いてないぞ！」

「利家殿はあんまりそういうことを気にしてないので、こっちで全

部手配をしてるでヤンス。あとで結納の案内状を出すでヤンス」

信長君は一気にいろいろな新情報がやってきて混乱してしまいました。深呼吸をして、まずは気分を落ち着くかせます。

「……………えーと、だ。俺は新郎の上司として、スピーチしないといけないのか？」

「もちろんでヤンス。とうか信長様は仲人ということにしているでヤンスから、よろしく頼んだでヤンスよ」

「え、仲人って。結婚式あげるのを聞いたのは今日なんだけど」

「だから今、ちゃんと頼んだでヤンス。よろしくお願いするでヤンスよ」

「う、むう。わかった」

「はいでヤンス。それで信長様の方でヤンスが……」

いろいろと周囲の変化を聞いた信長君は、自身の覚悟も決めました。

「いい、俺も決めた」

「お？」

「結婚する！ 秀吉、俺も結婚するぞ！」

「おお、その意気でヤンス。信長様、頑張るでヤンスよ」

「おおよ！ ……………時に秀吉。内密に聞きたいことがある」

「なんでやんしょ？」

信長君は、秀吉君を呼び寄せて耳打ちしました。

「濃姫って、マムシの道三の娘だよな？」

「そうでヤンス」

「青大将みたいのが来たら、その場で追いつ返しちゃうダメかな？」

「もちろんダメでヤンス」

「ダメか？」

「ダメでヤンス。もし青大将が来たときは……」

「来たときは？」

「覚悟を決めて、青大将の旦那さんになるでヤンス」

信長君は頭を押さえて、畳の上でジタバタしました。

「やっぱりかー。くそー、お前も利家もずるくないか？ 美人の嫁さんもらって。なんで大名の俺が、見たことない娘なんだよ」

「器量については聞いたことないでヤンス」

「うう、それはやっぱり……」

悪いから、と言おうとした信長君を、秀吉君は手を横に振って否定しました。

「違うでヤンス。尾張にすむお市様が有名すぎるから、隣国の姫の評判は全然伝わってこないでヤンスよ」

「ああ、そういうことか……」

お市の美貌は、すでに京でも評判になっているほどです。

お市の凄すぎる評判の前では、隣国の姫の評判なんて霞となって消えてしまうでしょう。

「お市、か」

「ん どうかしたでヤンスか？」

「いや、俺が結婚するって言ったら、お市がどう思うかなと」

「どうも思わないと思うでヤンスよ」

「いや、そのちょっと嫉妬とかしたりとか」

「はっはっは。ありえないでヤンス。気にせず結婚して問題ないでヤンス」

「そうか、気にする必要ないか」

「ぜーんぜんないでヤンスよ。お市様は、信長様なんて眼中ないでヤンスから」

「はっは、そうかそうか」

「それでヤンス」

「はっはっは」

「はっはっはでヤンス」

「はは………秀吉、お前降格。明日っからまた草履取りで再スタートな」

「ええええ！ そんな。ようやく足輕頭になれたのに。ひどいでヤンスよ、信長様」

「ダメ。もう決めた」

こうして、信長君の結婚がきまりました。お相手は濃姫。尾張であつたことがある人は、誰もいません。

第八話『信長君、結婚する』の巻

今日は信長君の結婚式です。

元々ちーっともモテたことがない信長君は、ガチガチに緊張していました。

ぶるぶる震えながら、隣にいる利家君の袖を引っ張りました。

「とととと利家。おおお、俺、へんなところ、ないか？」

「緊張しすぎだよ、信長のアニキ。大丈夫だって」

「そ、そ、そ、そんなこといってもだな」

信長君の情けない様子に、秀吉君も口を挟んできました。

「もっとどっしり構えてほしいでヤンス。信長様は尾張の国の大名なんでヤンスよ」

「お、おう。わかった」

信長君は形だけは重々しく、深く腰を落ち着けました。

「おけーでヤンス」

「いい感じだぜ。信長のアニキ」

その時、障子が開かれ、一人の少女が入ってきました。

いよいよ来たか、と中腰になった信長君の目に入ったのは、妹のお市です。

「あ、お市」

「お兄様、祝言を上げるそうで。おめでとうございます」

「あ、うん。ありがと……」

信長君はふと、結婚のことを全くお市に相談していなかったことを思い出しました。

理由は『忙しかった』というのがなくはないのですが、仮に忙しくなかったからといっても、超苦手分野である女性関係の相談を、信長君は妹のお市にはしなかったでしょう。

そしてお市の顔は、最近見たことがないくらい冷徹な感じです。

まるで昔に戻ったかのような、冷たい冷たい様子です。

（気にしてるかな）

信長君は覗き込むようにお市の顔を見ました。

お市は無表情です。無表情でも戦国一美しいその容姿は、影を差すどころかまた別の美しさがあります。

「お市。あの、さ。もしかして……」

「はい？」

「もしかして、もしかすると」

「早く言ってください」

「結婚のこと相談しなかったの、怒ってる？」

「……なぜ、そう思うのですか？」

「いや、その……なんとなく」

「そうですか。残念ながら、はずれです。市はお兄様がどこの馬の骨と結婚しようが、ぜんぜん気にしてません」

「あ、う」

「どーぞご勝手に」

「う、うん」

（めっちゃ怒ってるう）

信長君は秀吉君を呼び寄せました。

「おい、市は俺が結婚することを怒ってるみたいだぞ。話が違くないか！」

「あれれ？ うーん。多分、思春期にありがちな情緒不安定でヤンスよ」

「そ、そうなのか？ やっぱり相談しといたほうがよかったかな？」

「いや、ここはあえて突き放すでヤンスよ。冷たい態度をとって、後でそっと抱きしめるでヤンス」

「おお！ それいいな」

「ただ信長様は新婚なので、抱きしめる役はオイラがやるでヤンス。オイラも家には新妻のねねがいるでヤンスが、これも宮仕えの辛いところ。任せてほしいヤン……」

信長君は秀吉君の鼻っ面を思いっきり裏拳で殴りつけて、話題を中断させました。

鼻血を噴出させる秀吉君。

さておき、別の少女が部屋に乱入してきました。

「押忍、信長様。本日はおめでとうございます」

「うわ 蘭丸！」

姫衣装を着た美しい少女……に見える男子。尾張随一にして唯一の男の娘、蘭丸君です。

そして蘭丸君は信長君が大好きです。

「信長様は魅力あふれる男子。いつかは結婚なさると思っておりました。これも仕方のないことです」

「ああ、うん。だから俺のことはもう諦めて……」

「蘭丸は側室でも全然オツケーです。夫婦関係がこじれて悶々とした夜は、ぜひ寝室におよびください。押忍」

「お前、それは結婚式にいう言葉じゃないだろ！」

「あと蘭丸は性別上は男子です」

「いや、性別上も何も、お前は100%まじりっけなしに男子だろ」

「だから戦場にもお供できます。押忍」

「……で？」

「悶々とした戦場の夜には、ぜひ陣幕におよびください……」

「蘭丸、お前もう帰れ！」

「そうよ、蘭丸。帰るわよ」

お市も立ち上がりました。

そうです。蘭丸はお市のボディガードでもあるので、蘭丸が帰るということは、お市も帰るということです。

「あ、いや。違うぞ。蘭丸に帰れといったんで、市はいてもいいんだ」

「いえ。もうお暇いたします。それでは」

去ろうとするお市。

信長君は立ち上がり、勇気を出して言いました。

「お市。俺は今日結婚するけど、お市は俺の一番大切な妹だ。一番大切にしている妹だぞ」

それは信長君の偽らざる本音でした。この点に関して、少年期から信長君は変わることが一切ありません。

「……お兄様」

少し振り返り微笑むと、お市は去っていきました。ついでに蘭丸君も。

信長君は糸が切れたようにどっかりと座りました。

しばらくして、美濃から濃姫がやってきたというしらせがきました。

信長君がいる隣の部屋。

退出したはずのお市は、こっそりとここにいました。

「蘭丸、ここなら隣から気づかれないわね？」

「押忍。絶対に大丈夫です」

「そう」

「お市様も、ちょっとドキッとしちゃったんじゃないですか？ 信長様の最後の言葉には？」

「そ、そんなことないわよ」

お市は真っ赤になって否定しました。なぜ顔が赤くなってしまったのか、自分でもよくわかりません。

「蘭丸も信長様にあんな言葉をかけて欲しいです。そしたら蘭丸は、もう地獄の底まで信長様とお供できます」

「あなたは幸せね。でも私はそこまで単純じゃないわ」

「押忍。なぜですか？」

「お兄様は最近頑張ってきてるけど、根はとーってもおバカなの。それに男はみーんなスケベなの」

お市は偏った世界観を持っていました。ただ信長君は確かにおバカであった期間が長かったですし、お市のそばに来る男性はほとんど下心があります。

「そうとは限らないと思いますが」

「そうよ。絶対そう」

「そうですか？」

「だこうやって隣に潜んでいれば、絶対にボロを出すわ。私がいる時だけキチンとしようとしても、無駄なんだから」

「お市様、信長様はそういう人ではありません」

「黙って。いい？ 今にわかるから……」

隣から信長君の声が聞こえてきました。

ワイワイ、ガヤガヤ。

『いやー。美人だ美人だ。素晴らしい。濃姫は本当にお美しい』

『そんな、信長様。濃は照れてしまいますわ』

「いやいや。照れる姿も美しい。なあ、秀吉！ 利家！ ねねやまつにも負けていないだろ。なあ！」

『はっは。……いっそほんとに青大将が来ればよかったでヤンスに……』

『ははは……調子に乗りすぎだぜ、信長のアニキ……』

『いや美しい。本当に美しい。この人が俺の正室になってくれるなんて。今日はなんていい日なんだ』

『もう、そこまで言っていたけると。濃もうれしゅうございます』
ワイワイ、ガヤガヤ。

隣の部屋では、信長君が人生初のモテ期を満喫していました。

啞然とするお市と蘭丸君。

「……予想以上だったわね」

「押忍。ちょっと予想の斜め下をきました。いやでも蘭丸はそんなダメダメな信長様もラブですよ」

「あ、そ」

こうして信長君は美しいお嫁さんを得ると同時に、大好きな妹からの評価ポイントを大幅ダウンさせたのでした。

第九話『信長君、離婚の危機』の巻

秀吉君は農家出身ですが、野心のある男です。

「いつか武士になって、一国一城の主になるでヤンスよ！」

その甲斐あって今のところ尾張の武士にはなれたのですが、一国一城の主となるとなかなか難しいです。というか、農家出身の一介の武士ではとても不可能です。

（でもお城を持ちたいでヤンスよう！）

悶々としている日々を過ごしている秀吉君でした。

そんな中、信長君とお隣の美濃との仲が一気に陰悪化して、緊急軍議が開かれることになりました。

「あれ？ 一昨日、濃姫様とご結婚なされて、美濃とはハッピーフレンドになったんじゃないかなかったでヤンスか？」

秀吉君が当然あるであろう質問をしました。

「むうー」

秀吉君の問いに、信長君は仏頂面です。

それ以上に、お隣にいる清楚な感じの濃姫は、ふてくされて唇を尖らしています。

またその一方に座るお市と蘭丸君は、うつむいたままじつと下を見ていました。

秀吉君はおろか、他の者もわけがわかりません。

信長君が仏頂面のまま、状況の説明をしました。

「今朝、美濃から連絡が来てな。濃のおやじ殿、つまりmamushiの道三が……」

「ええ」

「……息子の下剋上でコロツと殺された。美濃は現在、息子の義龍が治めてる」

「へ？ でヤンス」

ぽかーんとする秀吉君。

義龍君は、父親である知恵に長けたmamushiの道三とは全く異なり、血気盛んな猛将です。

「義龍は我々との同盟を破棄するそうだ」

「え、えーと。そうするとこちらの濃姫は？」

秀吉君が唇を尖らしたままの濃姫を指さしました。

「義龍からの書状によれば『離縁するから美濃に送り返せ』ということだ」

「……はあ、なるほど」

下を向いていたお市が肩を震わしました。

「ぷっぷぷ。ダメ、もう我慢できない。お兄様、あんなに喜んでたのに。二日で離縁。ぷぷぷ」

「笑っちゃ悪いですよ。お市様」

「でも蘭丸。お兄様ってよーやくモテ期が来たのに。美人のお嫁さんだって自慢してたのに。新婚旅行どころか、50時間も持たなかった。ぷぷぷぷぷ」

どうやらお市が下を向いているのは、笑いをこらえていただけのようです。

家臣たちもまた、全員結婚式での信長君の浮かれっぷりをみていたので、その点では笑えました。が、国元に送り返される濃姫を思うとシャレにならないので、笑うことなんてさすがにできません。

「えーっと。では濃姫とはいっ離縁をなさるので？」

「う、む」

信長君は濃姫を見ました。

唇を尖らせたまま、それでも濃姫は気丈にしています。昨日までと異なり、今日から尾張はまた敵陣に変わったからです。

「ええと、濃」

「呼び捨ては気やすうございます。信長様」

「あ、ごめん……」

信長君はしょぼんとなりました。

「それでね。濃姫。ちょっとひどいことを言っていない？」

「はい」

「じゃあ、言うよ」

「どうぞ。覚悟はできております」

濃姫は背筋を伸ばし信長君のまっ正面を向きました。

「うん。……濃姫の故郷。美濃を滅ぼすけど、いいかい？」

「……………え？」

家臣全員の視線が信長君に集まりました。

「俺はさ、欲張りなんだよね。もらったものは返したくないんだ。濃姫はもう俺がお嫁さんにん貰ったんだから、絶対に返したくない。まして父殺しのところなんて、もってのほか。だから美濃を滅す。濃姫は絶対に返さない」

「そ、その……………」

濃姫は返事をする事ができませんでした。言葉の代わりに、濃姫の目からは涙があふれて頬をつたいました。

「ごめんね。泣かせちゃった」

「いえ、信長様、これは違うのです」

濃姫は深く深く信長君い頭を下げました。

「どうぞ、信長様のお気の召すままに。よろしくお願いいたします」

「侵略するよ？」

「どうぞ」

「お兄さんの義龍は、たぶん生かしておけないよ」

「はい。濃は、尾張の住民です。信長様に生涯従わせていただきます」

「うん、わかった」

「それと一つだけ」

「うん？」

「なにとぞ、なにとぞ亡き父の仇を討ってくださいませ。濃の希望は、それだけでございます」

父を失った娘である濃姫が涙ながらに言うと、信長君は濃姫をそっと抱きしめました。

と、そこで信長君が、今は軍議中でありこのラブロマンスを家臣全員が見ていることに気が付きました。

「ひゅー♪ やるねえ信長のアニキも」

「感動したんだな。感動したんだな」

「いや、よいものを見せてもらったでヤンスよ」

利家君が大喜びで指笛を吹き、勝家君が大げさに拍手をし、秀吉君が笑いながら冷やかしました。

その中で、一人テンションが下がっている人がいました。

「……本気？ お兄様？」

お市です。

お市の方は先ほどまでの笑い顔から一変して、冷徹な顔で信長君を見えています。

「おおともさ。一度娶ったお嫁を、おめおめ返せるか！」

どや顔で見えを切る信長君。家臣たちがやんややんやと盛り立てました。

「ふーん」

お市はポリポリと髪を掻きました。

なんだか先ほどまで信長君と濃姫を笑っていた自分が、どうしようもなくかつこ悪く思えてきました。

照れ隠しに何か口を開いても、憎まれ口しか出てきなそうです。

（これってもしかして。私はお兄様の度量に負けたのかしら？）

それはお市が生まれて初めて感じた、おバカな兄、信長君への敗北感でした。

「そう……頑張って」

お市はそう一言だけ口にして、立ち上がりました。

まるで捨て台詞のようですが、『頑張ってほしい』という言葉に嘘はありません。

「ああ、頑張るよ」

「うん」

お市は部屋を去っていき、あわてて蘭丸君もその後を追いました。

濃姫もまたさすがに軍議お開始と合わせて離席しました。

「よし、美濃攻略だ！」

「おお。それで信長のアニキ、誰が行く？ どう攻める？」

「うーん」

信長君は肝心のところで頭を掻きました。

美濃はマムシの道三が築いた難攻不落の城砦と化しており、攻めるのは一苦勞です。

とにかく川が多く、とがしている最中に弓を撃たれたらひとまわりありません。

「墨俣あたりに城を建てられれば、楽になるんだな」

「むー。あそこか」

利家君は築城の知識はからっきしですが、それでも墨俣という急な川と川に挟まれた三角州に城を建てるのがどれだけ大変だかわかります。

「あんなところに城は、建てられないんだな」

一応、築城の心得もなくはない筆頭家老、勝家君も当たり前の意見述べました。

「しかしあそこに城があればなあ」

「ねえものと言っても仕方ねえだろ。しっかりしようぜ。信長のアニキ」

「墨俣城が立てられれば、建てたやつを城の城主にしてやってもいいんだが……」

信長君の一言に、秀吉君は激しく反応しました。

千載一遇のチャンスです。

幸運の女神の前髪を、秀吉君は初めて見ました。

「はい、オイラがやるでヤンス！」

秀吉君は高く高く挙手をしました。

「おお、秀吉。やってくれるか!？」

「もちのロンでヤンス。任せてほしいでヤンス。成功すれば城主にしてくれるのは、間違いないでヤンスね」

「ああ、約束する」

信長君も報酬をキチンと約束しました。こうして秀吉君は、美濃攻めの為の墨俣築城の任を受けたのでした。

第十話『ツンデレラお市』の巻

尾張が誇る絶世の美女、お市が城の外にある自分のお屋敷の縁側でぼけーとしていました。

お市の脳裏には、たった二日前に来たばかりのお嫁を離さないとお見得を切った信長君のことが離れません。

朝からお昼近くなっても、ぼけーっとしたまま縁側に佇んでいました。

さすがにお屋敷の者が心配しました。

そこで尾張が誇る絶世の男の娘（兼お市のボディガード）の蘭丸君がお市に話しかけました。

「押忍。お市様」

「……」

返事がありません。

「お市様！」

「……」

かなり大声で言っても、返事がありません。

「……信長様……」

「へ！ お兄様？ どこどこ？」

そうとう小声で言った呟きに、お市は反応しました。

でも信長君がいないとわかり、お市は恥ずかしそうにうつむきました。

「押忍、お市様。信長様が気になるなら、お城に行ったらどうですか？」

「い、いいわよ別に。お兄様なんて気になんかしてないし」

「我慢は毒ですよ」

「我慢なんてしてないもん」

「してませんか？」

「してないって言ってるでしょ！ バカバカ、蘭丸おバカ！」

「……押忍、すみません。じゃあお市様は、今日はお出かけにならないのですか？」

「でーまーせーん」

「絶対？」

「でー！ まー！ せー！ んー！」

「押忍。そうですか。それでしたら蘭丸はお出かけします」

「なによ。蘭丸は何か用があるの？」

「ええ。お市様がお屋敷でおとなしくしているのでしたら、ボディ―ガードの蘭丸は必要ないでしょう？」

「まあ、そうね」

「じゃあ蘭丸はお城に行きます。愛する信長様に会ってきます」

「え！　ずる……」

ニヤツと蘭丸君が笑いました。それを見てあわててお市は否定しました。

「……くなんてないわよ。いってらっしゃい」

「そうですか。では、行ってきます」

「う、うん……」

お市は目を伏せて、手を振りました。

「ああ、ところでお市様」

「え？　いいわよ。べつにそんな。私はお城には一緒に行かないわよ。お兄様に用事なんてないだから。ほんとよ。嘘じゃないんだから」

「別にそんなこと言ってません」

「なんだ。そうなの」

「ええ。実は勝家様から伝言を頼まれているんです」

「え？ 勝家が、なによ？」

「ファンクラブイベントに使うので、色紙にサインをして欲しいそうです」

「……は？」

聞きなれない言葉です。

というか、聞いたことない言葉です。

「ファンクラブって、誰の？」

「もちろんお市様です。勝家様はお市様のファンクラブを作られたそう。会員1000名突破を記念して、ファンクラブイベントを開くそうです。その為にぜひ色紙にサインをして欲しいと言っていました」

「はあ」

ぽかんと口を広げたまま、お市はうなずきました。いろいろと言わなければならないのですが、出てきた言葉は一つでした。

「あのオッサン、なに考えて生きてるの？」

「押忍。それは蘭丸にはわかりかねます」

「まあ、いいや。どうでも。……色紙、ねえ。サインなんてしたことはないんだけど」

「色紙はお城にあるから、できれば取りに来てほしいと言っていました」

蘭丸君の言葉に、お市は大声を張り上げました。

「はあああ？　なんで私が取りに行くのよ。自分で持ってくるのが筋でしょう！」

「押忍。蘭丸もそう思います」

「そうよね！」

「では勝家様にはそうお伝えしますね」

「ええ！　というかサインなんて断るわ……」

「あ、断ります？」

蘭丸がわざわざと確認しました。

しばしお市は黙って考え、自分の意見を引っ込めることにしました。

「……いや。まあ、いいわ。気が変わった。サインしてあげる。色

紙も受け取りに行ってあげる」

「そうですか。」

「あくまで、あくまで色紙をとり！ お城に行くわ」

念を押すお市の言葉に、蘭丸君はにこっと笑って頭を下げました。

「押忍。では一緒にいきましょう」

「ええ。……ところで、お兄様はお城にいるかしら？」

「いると思われます。最近、美濃攻略で忙しいそうですから、軍議部屋にこもっているでしょう」

「そう。ふふふ。頑張ってるのね」

「押忍。信長様は頑張り屋です」

「そうね。それは認めてあげてもいいわ」

「押忍」

「……話は変わるけどさ」

「押忍？」

「なんで勝家が尾張の筆頭家老なの？ 役に立ってるのを見たことないんだけど」

辛辣にして、尾張の侍たちみんなが考えたことのある疑問を、お市は口にしました。蘭丸君が答えられるはずがありません。

「押忍。それも蘭丸にはわかりかねます」

「後でお兄様に聞いてみようかしら」

「勝家様が泣いてしまうので、やめたあげるのが武士の情けだと思われます」

「そう。難しいわね」

「男心は複雑なのです」

「蘭丸を見ると、なんとなくそれも納得できるわ。理解したくはないんだけど」

「押忍。蘭丸は男心も乙女心もわかってあげられる、理想の男の娘を目指しています」

「そうなの。まあ頑張って」

「押忍。では出かけましょうか」

「ええ。あ。ちょっとまって少しお化粧直してから行くから」

「では蘭丸も一緒に化粧直しをします。もしかしたら夜に信長様にお呼ばれするかもしれませんので」

「それはないわよ。ぜったい」

こうしてお市と蘭丸君は、今日も仲良くお城に行きました。

そんなこんなでお城の軍議室そばの廊下。

お市と信長がばったり出会いました。

「お、お兄様。こんにちわ」

「よう、お市。こんにちわ。最近、よく城で見るね」

「べ、べつにお兄様を見に来ているわけじゃないわよ。勘違いしないでよね！」

「う、うん。しってる。そんなこと言ってないだろ」

「言って……ないわね」

「ないよ」

「そう、ね。じつはちょっと勝家に用事があって……」

「うおおおー！！ お市様あ。おで、お市様に会えて嬉しいんだな」

目ざとくお市を見つけた勝家君が、廊下を走って張ってきました。

デブの勝家君は、走っただけ額からで汗が噴き出てきます。

「うわ！ 勝家、いたの。あんまり近寄らないでよ。汗臭いんだから」

「……あれ？ さっき勝家に会いに来たって言わなかったか？」

信長君が首をひねりました。

マズイといった顔をしたお市。言っただと同時に同じような顔をした信長君。

二人はあわてて否定しようとしたが、もはや間に合いませんでした。

お市が大々々だい好きな勝家君が、大興奮しはじめたのです。

「ぶおおお！ お市様がおでに会いに来てくれた。おで、嬉しくって嬉しくって、もう今日死んでもいいんだな！ 死んだってかまわないんだな 君のためなら死ねるんだな！ 赤ちゃんはどこから来るのかな！」

まるで野生動物に戻ったかのように、大声で叫び、暴れながら喜びを表現する勝家君。

もはや危険ですらあるので、信長君は勝家君からお市を庇うようにしました。

（……あ）

信長君とお市の手が触れました。

兄と妹の手が触れる。

たったそれだけのことですが、それはもうはるか昔、幼少期にしかなかったことです。

信長君も気が付いたらしく、顔を赤くしながら、お市の手を握っていました。

「ぎゃあゝ 信長様ゝ」

蘭丸君が勝家君の巨大な腹に吹っ飛ばされて、中庭に転がっていききました。

第十一話『魔人ハンベ』の巻

秀吉君は弟の秀長君といっしょに美濃へと出かけました。

墨俣に城を築くためです。

「施工はどこに頼むべきでヤンスかな？」

秀吉君が、弟の秀長君に相談しました。

一事が万事てきとーな秀吉君に比べ、弟の秀長君は万事そつなくこなします。

「うーんと、築城から公衆トイレまで何でも施工を請け負ってくれる、蜂須賀テクノスに任せるのが一番じゃないでゴザルか？」

「なるほどでヤンスな。じゃあさつそく……」

秀吉君と秀長君は、美濃の南部にある蜂須賀テクノスの本社に足を運びました。

「はい次の方。12番の秀吉さん」

「あ、順番でヤンス」

本社で見積もり依頼をかけて、回答待ちをしていた秀吉君と秀長君。

待合室でかなり待たされましたが、ようやく見積もりが出たよう

です。

担当者は小六君というベテラン営業マン。張り付くような営業スマイルで名刺を差し出してきました。

そして肝心の、小六君から出された見積書を見て、秀吉君は驚きました。

予算の三倍を超える金額です。

「ちょ、これは高いでヤンスよ!」

「もうしわけございません。お客様のお申し出の土地は非常に施工が難しく、土台工事に通常の数倍も費用が掛かってしまうのです」

「むう。しかしいくらなんでもこれは……」

「兄上、信長様から頂いた予算じゃ、絶対足りなくてゴザルよ」

秀吉君の耳元で、秀長君が小声でささやきました。

「むう……なんとか安くならないでヤンスか? この通り、お願いするでヤンス」

「こちら商売ですので。赤字を出すわけには……」

営業の小六君も、新規の受注は欲しいものの、いきなり値切られて困り顔です。

「なんとか、もうちょっとだけ負けてほしいでヤンス!」

「もうちょっととは、いかほどでしょう？」

「今の金額から……7割引いてほしいでヤンス」

「お客様、お帰りはあちらです」

小六君は冷たく言い放ちました。もはや一切の感情はありません。

「あ、ちょっと待つでヤンス話は終わってないでヤンスよ」

「お帰りください！ はい次の方、13番の一徹様」

こうして秀吉君と秀長君は、蜂須賀テクノスをたたき出されてしまいました。

とぼとぼと美濃の街を歩く秀吉君と秀長君。

「むう、困ったでヤンスよ」

「兄上……さっきお団子を買ってきたときに、ちょっと噂話を聞いたでゴザル」

「なんでヤンス？」

「東にある竹林に、魔法の茶壺が封印されているらしいでゴザルよ」

「……魔法の茶壺？」

「なんでも築城の秘術を封じた壺らしいでゴザル」

秀吉君に、天啓が舞い降りました。もはやこれは運命としか思えません。

「それでヤンス！ もうそれに縋り付くしかないでヤンスよ！」

「でも東の竹林ってだけじゃ、探しようがないでゴザル」

「信長様からもらった、築城の資金があるでヤンス」

秀吉君がにやりと笑いました。

逆に秀長君の顔が青ざめました。

「……まさか」

「このお金を全部、魔法の茶壺探しにぶっこむでヤンスよ！」

「あ、兄上！ それはいくらなんでも無謀でゴザル。茶壺はただの団小屋の噂話でゴザルよ」

「どっちにしてももう時間がないでヤンス。もし茶壺が見つからなかったら……」

「見つからなかったら？」

「出奔でヤンス。近江の浅井家あたりに仕官しにいくでヤンスよ」

「兄上……」

秀長君は説得しようとしたが、結局秀吉君が『押し切って魔法の茶壺探しが開始されました。』

「こんなの、あるはずないでゴザル。自分で言っというてなんでゴザルが……」

「あつたでヤンス！」

「うそお!？」

秀吉君の手には、黄金の茶壺が握られています。

茶壺のふたをこすると、中から美しい青年が現れました。

『我が名は魔人ハンベー。どのような願いも、三つ叶えてやろう』

魔人ハンベーは、ぱっと目にはただの青年だが、異様なほど整った容姿に、病的に白い肌、赤い瞳、鋭い犬歯と爪をもっており、明らかに人間ではありません。

そんな人外な風貌のハンベーと、秀吉君はにこやかに握手をしました。

「す、すごいでゴザルよ。兄上。神がかってでヤンス。さっそく墨俣に築城を頼むでヤンス」

魔人ハンベーに少しおびえながら、秀長君が言いました。

「うん、それでヤンスね……いや、その前に。ハンベールさん」

『何かな?』

「三つ願いをかなえたら、ハンベールさんはどこにいくでヤンス?」

『また茶壺に封じ込まれ、茶壺もどこかに飛んでいく』

「そ、そうなんでヤンスか? かわいそうでヤンスね」

『そういう決まりだ』

「じゃあ初めの願い事でヤンス。ハンベールを、茶壺に戻らなくってよくしてあげるでヤンス」

「ちょ、兄上!」

『よいのか!』

「三つも願い事があるんだから、別に一個ぐらいはいいでヤンスよ」

『妙な人間だ。三つしかない願いを、我を茶壺から出すことで使ってしまうとは』

「構わないでヤンスよ。あと二つも願い事をかなえてくれるだけで十分でヤンス」

『ふむ、ありがたい』

「いいことでヤンス。じゃあさっそく二つ目の願い事を言うでヤ

ンス」

『おお、何なりと。できる限り叶えてやるぞ』

「墨俣に城を築いてほしいでヤンス」

「お安い御用だ。ほら」

魔人ハンベーが軍配をふるうと、軍配のさした場所、墨俣に城ができていました。

「おおお！　すごいでヤンス」

「ハンベー妖術『イチヤジョウ』。如何かな？」

「ばっちりでヤンス！」

『では三つ目の願い事はなにかな？』

「うーーんと。今はちょっと思いつかないでヤンス」

『む、それは困る。今日中をお願いしたい』

「えーと、えーと。じゃあハンベー、しばらくオイラの部下になってほしいでヤンス」

『むむ!?!?』

「ああ、なるほどでゴザル」

ハンベールが驚き、秀長君が「なるほど」と手を打ちました。

魔法を使えるハンベールを部下にしてしまえば、魔法を使ってもらい放題というやり方もなくはありません。

『ふっふっふ。はーっはっは！ 単なるお人よしかと思いきや、意外と奸智に長けているな』

「え？ 何のことでゴザルか？」

秀吉君はわかっていません。

ただ思いついたことを言っただけです。

『我を部下にしたところで、我は魔法をもう使わぬぞ』

「構わないでゴザル。気が付いたことを、たまに助言してもらえば十分でござるよ」

『……なるほど。魔人の魔法ではなく、魔人の頭脳が欲しいということか』

「そう。そんな感じでゴザル」

『ふむ、まあいいよいだろ。封印の茶壺から出してもらった御礼だ。しばらく貴様のお傍にしているとするか』

「おお、助かるでヤンス」

『ではあらためて。我の名は魔人ハンベール。コンゴトモヨロシク』

こうして茶壺の魔人、ハンベールが吉君の部下に加わりました。

ハンベールの力によって築かれた墨俣城の力により、信長君は一気に美濃を攻略。秀吉君も無事に墨俣城の城主として、一国一城の主となったのです。

第十二話『光秀君と濃姫』の巻

信長君の部下には有名な人が四人います。

まずは信長君の幼馴染にして、やたらと強い派手好みの傾奇者、前田さんちの利家君。

「へへ。戦場じゃあどんだけ目立つかが、勝負の分かれめだよ。なあ、信長のアニキ？」

そして織田家筆頭家老のロリコンデブ、柴田さんちの勝家君。

「お市様LOVEなんだな。可愛いお市様の為に、おでは頑張るんだな」

それに足輕から登って行った出世頭、羽柴さんちの秀吉君。

「もっともっと偉くなるでヤンスよう！」

そして最後の一人。

美濃の斉藤家、越前の朝倉家を渡り歩いて尾張にやってきた、新参者。

新参者ですが、織田家の他の人にはない才覚を持っていたので、とても重宝されています。

才覚とは、お金もうけです。

武勇一辺倒の織田家では、誰も持っていない才能です。

新参者の名前は、明智さんちの光秀君といいました。

「ドゥフフ。信長様は銭の力というものを、ご存知ですか？」

その光秀君が、信長君い新しい商業奨励の提案をしてきました。

「ああ、もちろん」

「ドゥフフ。どの程度？」

「……いろいろ買い物ができるから、とても便利」

「ドゥフフフ。合っていますが、違います。いろいろ買い物ができるのではなく、何でも買えるのです」

「うん？」

「銭は城、銭は石垣、銭は堀、債権は味方、負債は敵。金融を制する者が、世界を制するのです」

「う、むう」

信長君は昔おバカでしたが、今は急速に頭がよくなりました。

それが可能となったのは、信長君の驚異的な呑み込みの速さです。

信長君は銭がすべてを制する世の中を想像してみました。

（なんか、いけそうな気がする。けど……）

「でも武力も必要だろ？」

「もちろん。しかし槍なんぞはもう古い。あんなのを振り回すなんて、バカのやることです」

「利家にはいうなよ。怒るぞ」

「ドゥフフフ。バカにバカにされるのはかまいません。ともかく今は鉄砲の時代です。あれは素晴らしいです。全軍に持たせたい。でもその為には……」

「錢が必要、か」

「ドゥフフフ。理解が早くて助かります」

「うん。わかった。じゃあお前の提案の『樂市樂座』ってのをやってみるか」

「ドゥフフ、では早速……」

そこに、女性が姿を現しました。

「信長様。お忙しいところすみません」

信長君のお嫁さん、濃姫です。

濃姫は、光秀君を見つけて、目を丸くしました。

「あれ、みっちゃん！」

光秀君も濃姫の姿を確認し、大慌てで背筋を伸ばして、まるで初々しい若武者のような澁刺とした顔をしました。

「やあ、どうも。お久しぶりです、濃姫」

「もうー、みっちゃんったら、いつも間に尾張に来てたの。言ってよ。美濃の人がいなくて、寂しいんだから」

「す、すみません」

「怒ってない怒ってない。みっちゃんも昔みたいにバシバシ戦場で働いてよ。みっちゃんは先陣でこそカッコいいんだから」

「ええ。もちろん！」

光秀君は若々しく、二の腕をパンと叩きました。

そんな光秀君を、信長君はみたことありません。

（え。なに？ なにがおこってるの？）

信長君はだまってこの推移をみているしかできませんでした。

そんな夫の心情などつゆ知らず、濃姫がじゃべり続けます。

「みっちゃんの槍は、お父様も褒めてたからね」

「はい！ 槍の光秀の力、ご期待ください！」

光秀君が笑いました。

（お前、さっき槍は古いとか言ってなかった？）

一方で、信長君は困惑するばかりです。

「うん。じゃあね。あと信長様」

濃姫が信長君に向き直りました。

「……………え、あ。はい？」

「今晚の夕食は、カレーでいいでしょうか？」

どうやらやってきた本当の理由は、夕食の献立だったようです。

「ああ、はい。けっこうです」

「ん。じゃあね。あ、みっちゃんも食べてく？」

「いやー。濃姫のごはんでしたらいくらでも入ってしまうんですが、もう夕食は用意してしまったので」

「そう、残念。じゃあまたね。信長様も、ご相談の最中、失礼いたしました」

「うん……」

信長君が人形のようにうなづく、濃姫が去っていきました。

しばし沈黙したままの信長君と光秀君。

初めに口を開いたのは、信長君でした。

「……………光秀」

「ドゥフフフ、はい？」

「なんか、いつもと全然キャラが違くない？」

織田家に来た時から、光秀君はドゥフドゥフ不気味に笑っていました。

口にするのは銭のことばかりです。

あんな健全な若武者っぽい光秀君は、見たことはありません。

「濃と、知り合いだったっけ？」

「ドゥフフフ、まあ。親戚というか、幼馴染というか、そういうのです」

光秀君は視線を外しながら、答えました。

光秀君と濃姫は、すでに滅亡した土岐一族の末裔同士でもあり、血は遠いですが縁の濃い親戚です。

「ふーん」

信長君は横を向く光秀君をじっと見ました。

「ドゥフ……如何がしました？」

「光秀ってさ」

「はい？」

「濃のこと、好きなの？」

「ドウ！　ななななななななぜそのような！　まったくありえぬ話です！　そもそも親戚とはいえ、濃姫は我が初めの主君であり師匠であるマムシの道三殿の娘であり、全く持って身分が違うわけで……」

「必死になるなよ」

信長君が笑いました。

「むむむむむ。楽市楽座の話に戻しましょう」

「ああ、いいぜ。槍の光秀よ」

「その名では呼ばないでいただきたい！」

光秀君は熟れすぎた金柑のようになって怒ったので、信長君はそれをからかって大笑いしました。

それはともかく。

信長君の発令した商業奨励の樂市樂座は大当たりし、信長君はジワリと財力を蓄えていったのでした。

第十三話『お市、結婚を決意する』の巻

信長君は部下である織田家四天王の利家君、勝家君、秀吉君、光秀君に支えられたり支えたりしながら、その勢力をどんどん拡大していきました。

そんなある日のこと。

お市に求婚の申し出が来ました。

戦国一の美少女であるお市には今までも沢山の求婚が来ていたのですが、今回はわけが違います。

戦国一のイケメン、浅井さんちの長政君からです。

『信長君。ユーのシスターお市を、ミーはお嫁さんに欲しいんだY
O』

信長君は、その書状を見て目を丸くしました。

「なんだこれは？ 何かの冗談か？」

「いえ。間違いなく、浅井家の書状でヤンス」

信長君の隣にいた秀吉君が、首を振って否定しました。

「ふざけているようにしか見えないな。よし、これは断ろう」

「それでヤンスね。オイラもお市様がお嫁に行くなんてまっぴら御

免の大反対でヤンス」

「だよな。お市がお嫁にいくなんて、まだ早いよな」

「その通りでヤンス。じゃあ書状は犬にでも食わせておくでヤンスよ」

「ああそうして……」

「ドゥッフ。あいやしばらく。信長様、この光秀は、こたびの婚姻に賛成です」

予定調和のように反対で結論していた信長君と秀吉君の会話に、光秀君が割って入りました。

秀吉君の「空気読もうよ光秀え」という視線にもめげず、光秀君は言葉が続けます。

「織田家のため、この婚姻はぜひ成立させるべきです」

「なんでさ?」

「長政殿は戦国一のイケメン。諸外国からの人気も高く、しかも近江は京に近い。信長様が天下を取るのでしたら、必ずや力強い味方となりましょう」

「む、天下かあ」

信長君は悩みました。

おバカであった頃より目指し続けていた戦国大名。その究極の形は、今日に上洛して天下人になることです。

しかしその為の道具にお市を使うつもりはありません。

しかもこんなわけのわからない相手になんて、絶対に嫌です。

「お、おでもお市様が遠くに行くのはやなんだな。ぜったい、やーなんだな」

お市ファンクラブ会長である勝家君は、もちろん大々反対でした。

「うーむ。筆頭家老の勝家も反対してるしなあ」

「ドゥフフ。この場合はむしろ、勝家殿の筆頭家老としての資質に疑問がありますな」

その意見には、実は信長君も秀吉君も賛成でした。が、あえて何も言いません。しかし勝家君が黙っているはずがありませんでした。

「なななな。侮辱は許さないんだな。おでは織田家の最古参なんだな。新参者に言われたくはないんだな！」

「ドゥフ。むかし謀反を起こしたくせに」

「あ、あれは信長様の弟の信勝様がかわいかったから仕方ないんだな。カワイイは正義なんだな！」

「ドゥフ、意味が分かりませんよ」

「とにかく反対なんだな！ 絶対反対なんだな！」

「オイラも勝家様にさんせーでヤンス。結婚反対でヤンス！」

「反対なんだな！」

「反対でヤンス！」

口々にやかましく言う勝家君と秀吉君。一方で光秀君は、冷静に囁くように信長君に進言しました。

「ドゥフフフ。もっと多角的な視野に立つのですよ、信長様。ここは婚姻の一択です」

「う、むう」

三人に言い寄られ、信長様は黙ってしまいました。

そこで気が付きました。

意見を言っているのが三人ということは、織田家四天王の最後の一人である、利家君が残っています。

「利家、お前はと思う？」

利家君は、信長君と同じくお市の幼馴染でもあります。幼少時には三人とも、一緒に川遊びをした仲間でもあります。

その後お市は美少女にクラスチェンジし、信長君と利家君はなかなか川遊びから抜け出せなかったわけなんです。

「信長のアニキよお」

「おお、お前の意見を聞かせてくれ！」

「こーゆーのは、お市に決めさせるのが一番じゃねえのか？」

「む……」

信長君は黙りました。

「ドゥフフフ。そのような受動的なことで、戦国の世は渡れるはずが……」

光秀君が反対しようとしたが、その言葉は信長君の耳には届きませんでした。

「利家……お前、たまに冴えてるな！」

「だろ？ やっぱ本人の意見が一番よ。なあ勝家のオッサンも、秀吉もそう思うだろ？」

「むー。反対でヤンスが、お市様の意見は尊重したいでヤンス」

「うんうん、そうなんだな。相手の意見を尊重する選択肢が、好感度ゲージをあげる基本なんだな」

秀吉君、勝家君もその意見には賛成です。

「だよな。そうしようぜ信長のアニキ」

「よし、決まりだ。いいな？ みつひ……、あれ？ 光秀はどこ行
った？」

信長君が意見を取りまとめたころには、光秀君はいずこかへと消
えておりました。

お市の部屋にて。

お市と蘭丸がぼんやりとしゃべっていると、いずこからか不気味
な声が聞こえてきました。

「ドゥフフフ」

「ひ、なによこの気持ちの悪い声は？」

「お市様、蘭丸の後ろに隠れていてください！」

ボディーガードとしての役割を思い出した蘭丸が、声の方向に向
かって刀を抜きました。

「ドゥフフフ。心配ご無用。光秀でございます」

「あ、あら。あなたが新参者の光秀？」

光秀君が、障子をあけてその姿を現しました。

「さようで。ドゥフフフ」

「濃さんの親戚だって聞いてたけど……」

お市はマムシの娘とは名ばかりの清楚な感じの濃姫と、いかにも腹に一物ため込んでいそうな光秀君を、脳内で見比べました。

「……似てないわね。すごく」

「ドゥフフフ。それは残念」

「で、なによ。あなたが私の部屋に来るってことは、なにか話があるんでしょう？」

「ドゥフ。これは話が早い。信長様の妹様だけあって聡明だ」

「……ふん」

「お市様は、信長様をどう思われておりますか？」

「え！ ど、どとどとど。どうって、なにがよ？別に、なにも思っていないわよ」

「そんなことはないでしょう」

「おもってません！」

「立派な戦国ぢあみようになってほしい、天下人になってほしい。そう思っているのではないですか？」

「……は？ ああ、そういうこと」

「ドゥフフ。それ以外に何か？」

「いえ、別に……まあ、そうね。昔はダメダメだったけど、最近頑張ってるし。天下人を目指すのも、いいんじゃないの？」

「ドゥフフフ。そうでしょうそうでしょう。それでお市様」

「なによ」

「天下人を目指す戦国大名の妹は、どうするべきかはご存知ですか？」

「……は？」

「信長様は口には出さずとも、お市様に望んでおられるのですよ」

「なにを？」

「戦国大名の妹としての責務を。戦国大名の信長として」

「……あんだ、なにいつてるの？ 頭おかしいの？」

「ドゥフフフ。今日はこれくらいにしましょう。それでは失礼いたします」

光秀君は去っていきました。

蘭丸君がお市に話しかけてきました。

「大丈夫ですか。お市様？」

「ええ。平気よ。でもなんなのかしら、あいつ。光秀、ね。なんだか凄く気持ちが悪いわ」

「ええ。危険な感じがします」

「ゾワゾワする」

「それは、勝家様よりも？」

「いえ、あのペドロリ変態のオッサンほどじゃないわ」

「ハハハ、それはひどいですよ」

「うふふふ」

二人は笑いあいました。

お市が光秀君の訪問の意図を知り、その顔から笑みが完全に消え去ったのは、翌日のことです。

信長君がお市に正式に浅井家からの婚姻の話を持ってきたのでした。

「お市。お前に婚姻のお話が来たんだ。相手は近江のイケメン、浅井の家の長政だそうだ」

信長君はなるべく私心を排して、冷静に状況を説明しました。

そうでないと、お市に決めさせたことにならないからです。

「わたしに、結婚の申し出？」

「ああ」

「……………」

『戦国大名の妹』

『その責務を』

『信長殿も望んでおられるのです』

光秀君の言葉が、幾度となくお市の頭でリフレインされました。

「お兄様、その長政というものは、織田家にとって有用なのですか？」

「う、うん……それはまあ。すごく」

近江を支配する長政君と婚姻関係を結べれば、もはや上洛は目前です。

軍略的な話で言うと、光秀君の言ったとおり、婚姻するのが最良の選択に間違いありません。

「そう、なの」

そして賢いお市には、それがきっちりと理解できてしまいました。

「でもな、お市。その……強制は全くしない。どちらかと言えば断ってほしい（小声）。お市がどうしたいかを、ありのままに言ってくれ」

信長君はお市に問いました。

お市はずっと考え、その間ずっと信長君の目を見ていました。

長い沈黙でした。

信長君はその間、ずっとお市の返事を待っていました。

お市は信長君の言葉を待っていましたが、その言葉はついに言ってもらえないと悟り、ようやく口を開きました。

「お兄様は……わたしにどうして欲しいか言ってくれないのね？」

「え？」

「……いいわ。わかった」

お市は過去の信長君とは比べようもないほど立派な大名になり、もはや天下人と道が開けている信長君を見て、その覚悟を決めました。

「お兄様」

「うん」

「お市は……」

「うん」

「お市は、お嫁に行きます」

「!!!!!!!!!!」

浅井家と織田家の婚姻。

戦国一の美少女と、戦国一のイケメンの婚姻。

そのニュースは織田家はおろか、全国津々浦々に激震を走らせたのでした。

閑話休題 『キャラクター紹介』の巻

今回は結構増えた登場キャラを整理する意味で、キャラの紹介回にいたします。

本編とはかんけーないので、読み飛ばしOKです。

信長の野望っぽく、出てくるキャラの能力とかを一覧にしてみました。

あと性格付けをわかりやすくするうえで、各キャラの愛読漫画とかも書いてきました。

よりわかりづらくなるかもしれませんが、フィーリング&ファジーでお願いいたします。

織田信長（信長君）

知力7 武力7

愛読書『ワンピース』、『バクマン』

お市

知力8 武力1

愛読書『よつばと』、『おおきく振りかぶって』

前田利家（利家君）

知力2 武力8

愛読書『クロース』、『アバウト』

羽柴秀吉（秀吉君）

知力4 武力5

愛読書『はじめの一步』、『弱虫ペダル』

柴田勝家（勝家君）

知力1 武力9
愛読書『コミックL O』

森蘭丸（蘭丸君）
知力5 武力3
愛読書『おと☆娘』、『わあい！』

明智光秀（光秀君）
知力9 武力7
愛読書『極悪がんば』、『ミナミの帝王』、『グラゼニ』

織田信勝
知力2 武力3
愛読書『きのう何食べた？』、『大奥』

竹中半兵衛（魔人ハンベ）
知力10 武力5
愛読書『乙嫁語り』、『ヒストリエ』、『テルマエ・ロマエ』、『ドリフターズ』

今川義元（戦国おじゃる丸）
知力8 武力9
愛読書『つらつらわらじ』

浅井長政（長政君）
知力5 武力8
愛読書『エアギア』、『リボーン』

第十四話『織田家 やる気0%』の巻

浅井家に嫁いだお市。

「ミスお市、ミーたちはユーを歓迎するYO!」

戦国一のイケメン、長政君がもろ手を挙げてお市を歓迎いたしました。

が、お市の顔色は優れません。

「どうも」

「おや？ ご機嫌がすぐれないYO。長旅で疲れたのかな？」

「そんなことは……」

「じゃあ早速祝言だ！ それから初夜だYO。立派な子どもを産んで欲しいYO」

「……ありますので、ちょっと休ませてください」

「そうかい。残念だYO」

「お布団を用意させるよ。ええと枕は二つ……」

「一つで、お願いします!」

お市は強く言い切り、新婚の相手となる長政君を押し切りました。

「押忍。お市様、大丈夫ですか？」

心配になった蘭丸君が聞きました。

「あれ？　なんで蘭丸が付いてきてるの？」

「押忍。蘭丸はあくまでお市様のボディガードの男の娘ですので、どこまでもお供します。たとえ近江だろうが、薩摩だろうが。お市様と一緒にです」

「貴方、お兄様のことが好きなんじゃなかったっけ？」

「はい」

「いいの？」

「押忍。かまいません」

「……なんで？　あ、もしかしてわたしに乗り換えるとか？　貴方も一応男だし。でもわたしこれから、結婚式なんだけど」

「押忍。お市様は好きですが、蘭丸は信長様一筋です。蘭丸は一本筋の通った男の娘ですので」

「そうなの。じゃあ、なんで近江に来たの？」

「押忍……乙メンの勘ともうしましうか。蘭丸は近江にいることにしました」

「ふーん。まあ、いいけどさ」

「新婚初夜まで、お供いたします。押忍」

「来なくっていいから!」

そんなこんなでお市の気分は多少、同郷の蘭丸君がいることで晴れましたが、相変わらずの曇り模様のまま結婚式を迎えました。

一方、尾張では。

「やる気がしないでヤンス」

ぐてーとやる気を喪失している秀吉君に、軍師役の魔人ハンベーが叱咤しました。

『我が主秀吉よ。今は手柄の上げ時ではないか?』

「お市様が結婚した。自分はもうだめでヤンス」

『関係なからう。もともと結ばれる可能性はゼロだったのだ』

「うう、でも……それとこれとは話が別でヤンス。アイドルと結ばれることができるか、アイドルが結婚しちゃったかは、まったく別問題でヤンスよ」

『むう。人の心は難しいな』

ハンベ―は頬を掻きました。隣国の浅井家と同盟を結んだ今こそ、領土拡張のチャンス。手柄の上げ時なのですが。

『筆頭家老の勝家殿も登城を断って屋敷に引きこもっているらしいぞ。今なら、筆頭家老にまでなれるチャンスなのだ』

「ううー、むしろ勝家殿の気持ちがよくわかるでヤンス」

『そんなことでどうする！ 我を仲間に取り入れた時のやる気はどうした。ほら、立て！ 信長殿の陣ぶれが来ているのだ。伊勢の北畠を攻めるぞ！』

「あー。光秀ががんばるから、いいんじゃないでヤンスか？」

『新参者に負けてどうする！ 我の知恵を貸してやるから、頑張るのだ。我を部下にした者が、織田家中で埋もれて終わるなんて認めぬからな！』

「ううー。わかったでヤンス」

魔人ハンベ―に尻を叩かれ、どうにか秀吉君は起き上がろうとしました。

織田家中は深刻な状況でした。

筆頭家老の勝家君はすでに半病人。

秀吉君もやる気なし。

勝家君が率いていたお市ファンクラブもなし崩し的に解散し、織田家中のファンクラブ会員は、深く絶望していました。

さすがにこの事態に、信長君も困りました。

いよいよ隣国の伊勢を支配する北畠を攻略するとなったのに、家臣たちの端から端までやる気がありません。

「なんだか最近、家臣たちの士気が低いな」

信長君が利家君に相談しました。

「お市は人気があつたからなあ」

「そうだな。この結婚、やっぱり失敗だったかな？」

「今さら言っても仕方ねえだろ。お市が決めたことだ」

「そうだけどさ……。利家、頼りにしてるぞ」

「おお、任せとけ！ と、言いたいところだけど、ちょっと今回はいけねえや」

「ん、どうした？」

「まっくにまた子供が生まれそうなんだ」

「え？ またか？」

利家君とまつは戦国一のおしどり夫婦です。

のちの世にわかることですが、二人の間には子供が八人も生まれることとなります。

「四人目だぜ。まつが可愛いすぎてな、ついつい（放送禁止）に（放送禁止）しすぎてよ」

「聞きたくないぞ」

「へっへ。そんなわけで、俺はちょっと産休な。今回の出兵はパス」

「……は？ いやまて、男が産休をとるのはおかしいだろ？」

「あれ、そうだったか？ じゃあ育児休暇？」

「それも違う！ まだ生まれてないだろ」

「ともかく今回は一回休みで頼むわ。まつが難産っぽくてよ」

「まてまて。伊勢を一気に攻略するんだぞ。勝家が使い物にならないのだ。お前まで行かなくてどうする？」

「そいつはよくわからねえが、とにかく俺はダメだ。今のまつには、俺が必要だ」

「いや、なんとかならんのか？ 必要なのは多分、産婆さんとかだろ」

「産婆なんていらねえ。俺がいれば十分だ。俺がいなくちゃダメなんだ」

「いやいやいや。難産に武将のお前が付いててどうする気だ？ 必要なのは産婆さんだろ？」

「まつには俺が付く。産婆には戦場に行ってもらう」

「逆だろ！ 産婆さんに戦場で何をさせるつもりなんだよ！」

「とにかく、今回だけはダメだ。信長のアニキ。頼んだぜ」

「う……」

今まで散々利家君を頼ってきた信長君。こういわれると、黙るしかありません。

「……わかった。じゃあ今回は俺と、秀吉とで頑張るか」

「あれ？ 光秀は？」

「朝廷工作で手いっぱいだ。京に上洛するにはいろいろ前準備が必要らしい。そういうことができるのは、あいつだけだから」

「よくわかんねえな」

「まあ上洛ってのは大変なんだ」

「そっか。まあ、とにかく今回は頼んだぜ。お土産は伊勢神宮の土産お守りで頼む」

「わかった。まつには宜しく伝えてくれ」

「おおよ！ そっちも頑張れよ。じゃあ家でまつが待ってるから、俺はもう行くぜ。じゃーなー」

利家君が去っていきました。

「……………利家、これないか」

頼りにしていた右腕が来ないとあって、信長君は落ち込みました。

「失礼、魔人ハンベ―仕りごさ候」

「おわ！」

秀吉君の軍師である魔人ハンベ―が、音もなく信長君の影から姿を現しました。

片手には、すごいやる気のない秀吉君を担いでいます。

「相変わらず人外だな。ハンベ―」

「ふっふっふ。我は魔人にて、人の理は通用しませぬ。それと我が主の秀吉を連れてまいりました」

「……ヤンス」

「やる気ないな、秀吉」

「ないでヤンス……でもとりあえず頑張るでヤンス」

「頼りにして……いいわけじゃなさそうだな」

「ヤンスー」

信長君はやる気が全くない部下を引き連れ、伊勢の北畠を攻略に向かいました。

もともと北畠にはさしたる武将もなく、兵も多い信長君の圧勝のはずだったんですが。

「あーあ」

「なんか、のらないなー」

「だなー」

兵の士気が全く上がらずに思わぬ大苦戦。

どうにか伊勢を攻略した時には、大きなダメージを信長君の軍隊も負っていたのでした。

第十五話『信長君とお公家衆』の巻

ボロボロになりながらもどうにか伊勢、伊賀を陥落させて、信長君はついに京へと上洛しました。

これで信長君は天下人です。

信長君は京の人々の大歓声の中、京に入りました。北畠との苦戦により軍勢はボロボロでしたが、さして信長君は気にせずこの一瞬を楽しんでいました。

「俺が京に上洛して天下人になれるなんて。感無量だ」

「喜ばしいでヤンス。オイラも天下人の部下だからお給料大幅アップでヤンスよ」

秀吉君と喜びを分かち合う信長君。

そこに光秀君が割って入りました。

「ドゥフフ。では信長様。早速、朝廷へのあいさつをお願いします」

「おう」

信長君は光秀君と一緒に京の御所へとむかいました。

御所には白粉を顔面に塗りとくって、頬に薄い赤丸を書き、眉を丸く黒で書いた、気味の悪い公家が集団でおりました。

「……う、なんだあいつら？」

「ドゥフフ。信長様、思ったことを口に出すのは悪徳です。ここは京。彼らは先住民で、我々は新参者です。転校初日の学生のように、万事控えめでおねがいします」

「そう、だな。オッケ。わかった」

「ドゥフ、くれぐれも、控えめに。彼らの支持を失えば、信長様は木曾義仲のような憂き目にあいますよ」

「う、む」

信長君は、せっかく上洛したのに裏切られてはたまらないと、公家衆に丁重に頭を下げました。

「はじめまして。信長です」

「によほほ。信長さん、ずいぶんとお疲れのようで」

「によほほ。これからは京の為に」

「によほほ、足利幕府の為に」

「によほほ、我々、公家の為に」

「によほほ、より一層働くことを期待しておじやります」

公家たちは口々に勝手なことを言いました。

「は、わかりました」

気持ちを抑えて、信長君はぐっと頭を下げていましたが、その脇を光秀君がつつきました。

「なんだよ？」

「ドゥフフ。気持ちはわかりますが、合わせてください」

「は？」

「お公家衆のしゃべり方に合わせるのです。それが朝廷での礼儀です」

信長君はその言葉を聞き、あらためてによほによほ笑う公家集を見ました。

公家たちの視線は、田舎ものを見るような冷たいものに変わっています。

態度が冷たくなった理由。それは言葉遣いに他なりません。

「……マジで？」

「ドゥフフ。マジです」

「なんで俺が戦国おじやる丸みたいなしゃべり方で……」

「ドゥフフ。思えば今川義元殿は、駿河に居ながら京の朝廷をみておりました。信長様も負けたくはないでしょう？」

「っぐ。わかった」

信長君は覚悟を決めて、公家衆に向かい合いました。

「によほほ、信長さん、いかがでしたでおじゃるか？」

「によ。ニヨホホ…」

「によほほ。信長さん、も京の言葉を使われるでおじゃるか？」

「ニヨホホ。ええまあ。ぼちぼちつかいます……で、オジャル」

「によほほ。それはなにより。一刻も早い京の水になじむことを期待するでおじゃりますよ」

「によほほ」

「によほほ」

「はは、はい。ニヨホホ……」

信長君の屈辱的な到底訪問は、こうしておわったのでした。

信長君は肩を怒らせて、お城に戻りました。

「くっそー。俺があんな変なしゃべり方をさせられるなんて！ 濃
やお市には絶対見せられん！」

「ドゥフフ。その公家衆との交渉をずっとやってきた私の功績をお

忘れなく」

「いや、光秀は大丈夫だろ。「ドゥフフ」を「によほほ」に変えるだけだし」

「ドゥフフ。これは手厳しい。私にもストレスなのですよ」

「そうなのか？」

「ドゥフ。当然です」

「そっかー。まあそうだよな。普通の人間は、いやだよな」

「当たり前です。ドゥフフ」

信長君と光秀君が話していると、そこに秀吉君が来ました。

「信長様あゝ」

「おお、秀吉か」

「によほほ。ナウなお公家にバカ受けのしゃべり方をマスターしたでヤンスでおじやるよゝ」

「……」

走りこんでくる秀吉君に、信長君と光秀君は無言でダブルラリアットを食らわしました。

一方そのころ。

朝廷では公家たちが信長君のことについて話しておりました。

「によほほ。信長さん、あまり京のことが好きではないようでおじやるな」

「というか、我々が嫌いなのかも。によほほ」

「によほほ。北畠ごときに苦戦をする貧弱な軍勢が、調子に乗っているでおじやりますな」

「によほほ。まったく」

「によほ。戦国おじやる丸殿が上落してくれていれば、このようなことはなかったでおじやるのに」

「過ぎたことは仕方ないでおじやるよ。によほほ」

「によほほ。浅井さんちと同盟を結んで、調子に乗っているようで」

「によほ、では？」

「によほほ。まずは仲たがい。誰でもよいから、信長さんを討ち取っていただきますようか」

「によほほ。あのような貧弱な軍勢、誰でも討ち取るのは簡単でしょう」

「によほ。で、討ち取った者がまた上洛したら？」

「その者もまた別の者に討ち取らせればいいでおじゃるよ。によほ
ほ」

「によほ、それでいずれは？」

「によほほ。またあの懐かしき。平安の世が来るのでおじゃります」

「によほほ、素晴らしい。歌と蹴鞠の楽しいき日々でおじゃりますな」

「によほ。朝廷の朝廷による朝廷のための平安時代でおじゃります
よ」

「によほほ。では、そのように」

「「「全ては我ら公家衆のため」」」

「によほほ」

「によほほ」

「によほほ、でおじゃりますな」

公家たちの陰謀により、信長君の様々な悪評が京から日本全国へ
ばらまかれることとなりました。

寺を焼いた。僧侶を殺した。農民を虐殺した。大仏燃やした。

そんな信長君の事実無根な悪評がばらまかれ続け、信長君がまったく知らないうちに、信長君は世界を暗黒へ落とす魔王のように語られるようになっていきました。

いつのまにか信長君の周りは、敵だらけになっていたのです。

第十六話 『信長君は同盟国が少ない。略してはがない』の巻

お公家衆の流言飛語により、すっかり嫌われ者になった信長君。

京の町を歩いていても、みんながみんな信長君の姿を見るや否や反転して逃げていきます。子供に話しかけると泣き出されます。大人に話しかけると財布を出して許しを請われます。

もともと人から褒められるのが大好きで、反面打たれ弱い性格の信長君にとって、これは堪えました。

「どーせ俺は嫌われ者♪ 悪の元凶魔王様♪ 今日も生きててごめんなさい♪ ハ、ハハハ……」

お気に入りの茶室に引きこもり、自虐的な歌に乗せて乾いた笑いをうかべる信長君。

京に上洛した天下人の、その地位とはあまりにかけ離れた状況に、さすがに周りに者も心配しました。

プチ引きこもりな信長君を立ち直らせるため、織田家の四天王である利家君、秀吉君、勝家君、光秀君が集まって、対策会議をおこなうこととなりました。

「やべえぜ、信長のアニキ。ぶっ壊れる寸前だ」

信長君の幼馴染である利家君が言いました。

「ドゥフフ。いっそ本当に魔王になってくださるほどの豪胆さがあ

ってもよいのに」

とは、四人最高の知恵者の光秀君。

「そりゃ無理でヤンスよ。信長様は、人から褒められたいとか、人をびっくりさせたいとか、そんなワンパク子供気質が満載でヤンスから」

意外と鋭い、けど口が悪いのは秀吉君です。

「でもこのままじゃあ困るんだな。おではあんな信長様、見てたくないんだな」

筆頭家老の勝家君が言いました。

三人の視線が、さておき勝家君に集中しました。

「勝家のとつつあん。もう復活したんだな？」

「ご心配をかけたんだな。もう大丈夫なんだな。鬼柴田は不滅なんだな」

利家君の疑問に、勝家君は胸板を叩いて答えました。肥満しすぎのでっ腹が、叩いた振動でポヨンと動きました。

勝家君はお市の結婚に一番ショックを受けており、ずっと食事を立ってストレスで過食の毎日を過ごしておりました。もともと肥満しすぎの体には、さらに肉が増して肥えています。

「お市様のことはショックなんだな。でもいつまでもクヨクヨして

でも仕方ないんだな」

「そうだぜ。落ち込んでても仕方ねえって」

「お市様はいつまでも生きているんだな。おでの心の中に」

「いや、ちゃんと物理的にも生きてるでヤンスよ。近江で。子供も生まれたって聞いたでヤンス」

「……まぶたを閉じれば、今でもお市様の姿が浮かぶんだな。10歳で、夏で、薄着をして、水遊びをして、ちょっと服が透けている。お美しいくも健やかなお市様……」

うっとり自分の妄想をしゃべる勝家君。

全員がげんなりとそれを聞いておりました。さすがにお市ファンでは同士である秀吉君も、勝家君ほどの妄想力はありません。

「脂肪にくわえて変態性も増してやがん」

「ちょっと気持ち悪いでヤンス」

「ドゥフフ。いっそあのまま頭を丸めて出家でもしてくれればよかったのに」

三者三様の引きように、勝家君が大声を張り上げて反論しました。

「みんな黙るんだな！　今は信長様の話をしてるんだな！」

「いや、話をそらしたのは勝家様でヤンスよ」

「そらしてないんだな！」

勝家君はジタバタと暴れながらも、大声で主張しました。

「信長様にはお市様が必要なんだな！ お市様が褒めてくれないと、信長様は駄目なんだな！」

「ドゥフフ。なにを馬鹿なことを」

「さすがにありえないでヤンスよ」

光秀君と秀吉君が言いました。

が、利家君は何も言いませんでした。

幼馴染である利家君は、信長君の大馬鹿だった時代をよく知っています。

どうしようもなくお馬鹿であった信長君が、人が変わったように大名を目指しだしたきっかけがありました。

それは確かに。間違いなく。

「お市、だ」

利家君がつぶやきました。

記憶違いなどではありません。信長君は、確かにお市が戦国一の美少女になったのに感化されて、自分も戦国一の大名を目指しだし

たのです。お市においていかれないために。信長君にとって、妹のお市が氣力の根源にも近かったのです。

それに気が付くと同時に、利家君は悩みました。

今さらどうしようもないからです。

お市はもう浅井さんちの長政君に嫁いでもしました。長政君は、いまや敵だらけになった信長君にとって、たった一人だけ残った貴重な同盟国です。お嫁さんを帰してほしいなんて、絶対にいえません。いえるわけがありません。

長政君が、信長君に反旗を翻さない限りは。

一方そのころ。近江にて。

お市を遠巻きに見ながら、女中たちが噂話をしていました。

ヒソヒソヒソ

「ほら、あれが……」

「ああ……魔王の妹の……」

「長政様もかわいそう……あんなお嫁を……」

お市が耳には届く小声のおしゃべりに耐え切れなくなって女中達を見ると、女中たちは一礼してどこかへ行ってしまうのでした。

そしてしばらくするとまたヒソヒソ声が聞こえてくるのです。

お市は深くため息をつきました。はつきりいって、最近のお市の生活は針のむしろです。民にも家中にも人気絶頂の長政君のお嫁であるから直接的には何も来ないのですが、かわりに陰口は叩かれ放題。

その気苦労は限界にきていました。

「押忍。お市様、おいたわしい」

護衛役として尾張から来ている美貌の侍女、の格好をした男子である蘭丸君が、お市を励ましました。

「ああ、蘭丸……。べつに。どうってことないわよ」

お市が微笑みました。戦国一の美少女といわれたお市の美貌は、三人の子供を生んだ今となってもまったく衰えていません。美貌は衰えていないのですが、気疲れでこけた頬が痛々しく、蘭丸君の心に突き刺さりました。

「信長様が噂のような悪逆非道をするはずがありません。これは絶対、誰かが……」

「あたりまえよ！」

蘭丸君の言葉を最後まで聞くこともなく、お市はぴしゃりと言いつ切りました。

「……押忍」

「お兄様は、おばかで、頼りなくって、へなちょこで、もてなくって、甘いものが大好きで、新しもの好きで、ほんとうに子供みたいなひとだけど……。でも酷いことはできないわ。ねえ、わかってるでしょ？」

「押忍。蘭丸はわかっています」

「じゃあなんでみんなも、わからないのよ！」

「押忍」

蘭丸君は何も言うことができず、ただ頭をたれました。

信長君の悪評の伝播には、実は他国の大名達の微妙な心理も作用しておりました。

いってしまえば他国の大名にとって、天下人になった信長君は全然歓迎できない存在なのです。そんな大名達の心理は家中にも伝播し、広く民衆にも伝わります。

公家衆の信長君への悪口が急速に広まった理由には、そういった意味もあるのです。

「長政様も、悪口をとめてくださればいいのに。お兄様の同盟国なんだから」

「押忍。そういう指示は出ていません」

「なんでよ！」

「……蘭丸にはわかりません」

「もう、蘭丸の役立たず。まったく、もう……」

ヒステリックに言いつつも、お市はその明晰な頭を回転させました。

その思考はやがてある仮説を生み、仮説は推測となり推測は推理となりました。

そうしてお市は気がついてしまったのです、長政君にとっても悪影響が出るはずの同盟国の悪口を、長政君はまったく食い止めない理由を。

「蘭丸。長政様は、まったく悪口を止めていないわね？」

「押忍。残念ながら」

「それは止めてないの？ それとも、積極的にばら撒いてる？」

蘭丸君はしばし黙っていましたが、やがてゆっくりと口を開きました。

「……押忍。言いたくはありませんが、じつは積極的にばら撒いている側です。長政様にとって、信長様は義理に兄に当たるのに。信長様ラブの蘭丸は、とっても悲しいです」

「そう、なの」

お市は自分の推理が当たっていると確信しました。それは信長君にとって、悲劇的な結末を迎える推理です。

なんとしても回避しなければなりません。信長君が破滅しない為に。

「……蘭丸。茶々と初と江を連れてきて」

お市は自分と長政君との間にできた三姉妹をいました。三人ともお市にとって、なによりも愛おしい娘たちです。

「押忍。なにか火急の用事ですか？」

蘭丸君が確認すると、お市は小さくうなずき小声で蘭丸君に告げました。

「あせらず、急がず、誰にも気づかれずに。でも大至急、旅支度をして。出来るわね？」

それで全てを察した蘭丸君は、大言壮語はせず、ただうなずいて一言だけ言いました。

「全て蘭丸にお任せを」

「あと蘭丸、一個だけ確認しておきたいんだけど」

「押忍」

「蘭丸は……。お兄様のことは、まだ好き？ みんなから魔王とか

いわれて、嫌われてるけど？」

蘭丸君にも、迷いはありません。今日この日のために蘭丸君は近江まで来たのだと、自分で確信すらしております。

「蘭丸は一途な男の娘です。一生お婿にもお嫁にも行かずに、信長様ラブでいく所存です」

その答えは、お市と蘭丸君がまだ尾張にいた時と、まるで変わっておりませんでした。あまりの変化のなさに、お市はつい笑ってしまいました。

もう近江に興入れしてから、三年もたちます。

「うふ、そう。蘭丸って、馬鹿みたいね」

「押忍。激烈にラブってます故、馬鹿と言われてもぜんぜん平気で」

「強いわね……わたしも、嫌いじゃないわよ。お兄様のこと」

「存じ上げてます」

「そっか。じゃあ、帰ろうか。お兄様のところに」

「押忍！」

久しぶりに見せたお市の素晴らしい笑顔に、蘭丸君の元気のいい返事しました。

それから数時間後。

お市の部屋にあわただしく一人の男が入ってきました。

長政君です。

「マイスイートお市！ とても残念なお知らせがあるんだYO。僕はみんなのために、魔王、信長と戦わなくっちゃならなくなっただ！ でも魔王を倒すのは勇者である僕の……。あれ？ お市はどこかYO？」

長政君がいくら探しても、お市も護衛の蘭丸君も、娘の茶々、初江も、見つかりませんでした。

翌日、長政君は信長君へ宣戦布告をし、約三年にわたるお市と長政君の結婚生活は終幕を迎えたのです。

信長君にはいよいよ最後の同盟国もなくなり、京に上洛したまま孤立することになったのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4276x/>

私の妹がかように可愛きわけもなし

2011年11月12日17時03分発行